

---

# バカと奇人と召喚獣

雷鳥

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカと奇人と召喚獣

### 【Nコード】

N1978S

### 【作者名】

雷鳥

### 【あらすじ】

世界で唯一の「試験召喚システム」を取り入れた『文月学園』に通う有明洋太郎は、振り分け試験をまさかの理由で休み、見事（？）に2-Fに進級し（てしまった）た。彼はまた、たった2人しかいない「試験戦争研究会」の一員だった。

はてさてそんな奇人（変人とも）と言ってしかるべき彼は、如何様に頑張るのでしょうか。

## 序章（前書き）

（バカテスト）化学）

問題：調理の為に火にかける鍋を制作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。このときの問題とマグネシウムの代わりに用いるべき合金の例を1つあげなさい

姫路瑞希の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると、激しく酸素と反応するため危険であるという点。』

合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので鉄ではダメと言うひっかけ問題なのですが、姫路さんは引っかけかりませんでしたね。

2

天王洲さくらの答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると激しく酸化する点。』

合金の例……真鍮』

先生のコメント

これも正解です。真鍮は黄銅とも呼ばれ銅と亜鉛の合金です。

有明洋太郎の答え

『問題点……軽いというだけでマグネシウムを鍋の材料に選択してしまった愚かさ。もし、マグネシウムが鍋に向いていたら重たい鉄鍋や土鍋は流通しにくいはずだ。しかしなぜそれは世間一般に一回らなかったのか、それになんらかの無視できないデメリットがあるからだと考察できなかった無能さ』

合金の例……ステンレススチール』

先生のコメント

そのデメリットを答えてくれれば結構です。合金については正解です。

土屋康太の答え

『問題点……ガス代を払ってなかったこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

『合金の例……未来合金（すごく強い）』

教師のコメント

すごく強いと言われても…。

## 序章

新学期、普通の人ならば気が逸るものがあるだろう。

しかしながら、今年度から文月学園2年生になる有明洋太郎はそんなものとは全く無縁であった。

「はあ、インフルエンザをやつとのことで治したのに、まさか予備日で休まされるとはね…」

「おはようございます、洋太郎さん。今日も気持ちの良い朝ですね。」

たつた今、洋太郎に向かい美しい声で挨拶したのは、はすむかいに住む名家の一人娘『天王洲さくら』である。

「おはよう、気持ち良い朝だよ、試験さえ受けられればね。」

普段からの付き合いか洋太郎は軽くこぼした。

「それは…ご愁傷様としか言いようがありません。」

「いや、さくらは気にしなくて良いよ。悪いのは自分だから。」

二人は通学路をいつものように進んだ。

「おはよう、天王洲・有明」

「おはようございます西村先生」

「どーも、お勤めご苦労さん。」

いつもは誰もいない校門前には西村先生が立っていた。

「さて、振り分け試験の結果を渡そう。天王洲、よく頑張ったな。」

『天王洲さくら Aクラス』

「ふーん、すごいじゃん。ぎりぎりBかと思ってたけど」

「ありがとうございます。直前に洋太郎さんから教えていただいた歴史が功を奏しました。」

「礼には及ばないよ。んでMr・西村、まさかの理由で休んだ俺はFなんだろ」

「ああ、まあ頑張ってくれ」 『有明洋太郎 Fクラス』

「やるだけやってみますわ。んじゃあな、さくら。」

「はい、失礼します。洋太郎さん」

校門を出た二人は、そのままそれぞれの教室へと足を進めていった。

## 序章（後書き）

これからよろしくお願いします。感想いただけたら幸いです。

## 設定

試召戦争のルールにつきましては割愛させていただきます。他作品様にございますのでそれをご覧ください。

試召戦争の書き方を変更しています。

名前・科目については全て英語です。具体的には次のようになります。

本来 当作品

現代国語 Modern Japanese（生徒たちは現代文と呼びます）

古典 Classics

数学 Math

英語 Reading

英語 Writing（生徒たちもライティングと呼びます）

物理 Physics

化学 Chemistry

日本史 Japanese History

世界史 World History

保健体育 P.E.

例えば、明久と玉野さんがが数学で戦っている場合の表示は……

Subject: Math

Class F

Name: Akihisa Yosi

Score: 38

VS

Class D

Name: Mikiko Tamano

Score: 88



といった感じになり、点数は『88 75』といったようになりま  
す。

では、オリキャラ紹介をば。

有明洋太郎 Fクラス

成績に執着は無いが、本来ならAとBの瀬戸際くらいの成績はある。  
しかしインフルエンザにかかり、試験前日に治したものの出席停止  
期間であつたために振り分け試験を欠席した（しざるを得なかった）。

試召戦争研究会を立ち上げ、放課後は学園側で撮影した映像を見  
て研究なり考察なりお菓子を食べるなりしている。（そのうち番外  
編でやるかも）研究者気質のためあまり友達はいない。

容姿は純粋な日本人、つまり黒目黒髪を短髪にしている。身長体  
重は標準的。

研究者気質がうまくいったのか、料理は神懸かっている。

明久達とは特に面識はないが明久が観察処分者であることは知っ  
ている。

先生のことをMr・Ms・と呼び生徒については呼び捨てなり  
「さん」なりを使っている。

天王洲さくら Aクラス洋太郎のはすむかいに住む。せいぜいB  
のトップクラスの成績だが前日に洋太郎から歴史を教わったのが功  
を奏して見事にAクラス入り。

試召戦争研究会のメンバーでは『ない』。

容姿はウェーブのかかった綺麗な金髪、身長はだいたい洋太郎よ  
り少し小さい程度。同じくお嬢様の霧島との比較で「漆黒の霧島・  
黄金の天王洲」と呼ばれる。体型は翔子以上のナイスバディで胸の  
大きさはD＋Eクラス。

翔子とはパーティーでよく見かける間柄。

## 設定（後書き）

感想等なんでもお待ちしております。

## 第1問（前書き）

バカテスト 国語

以下の意味を持つことわざを答えなさい

- （1）得意な事でも失敗してしまう事
- （2）悪い事があつたうえに、更に悪い事が起きる喩え

姫路瑞希の答え

- （1）弘法にも筆の誤り
- （2）泣きつ面に蜂

教師のコメント

正解です。他にも（1）なら“河童の川流れ”、“猿も木から落ちる”、（2）なら“踏んだり蹴ったり”や“弱り目に祟り目”などがありますね。

有明洋太郎の答え

- （1）ホメロスでも居眠りをする。
- （2）痛む上に塩を塗る

教師のコメント

これも正解ですが（1）は英語圏のことわざですので次からは日本の物にしてください。

吉井明久の答え

- （2）泣きつ面蹴ったり
- 教師のコメント

君は鬼ですか。

土屋康太の答え

- （1）弘法の川流れ

教師のコメント

シュールな光景ですね。

## 第1問

「ここがFクラス……？2-Fって書いてあるから間違いないと思うのだが。」

下駄箱の側にある階段を昇ると新校舎にあるAクラスの教室が見えて九分九厘絶望するため、敢えて先に旧校舎からまわったが、それでもなおあまりの教室の外観に驚いていた。しかし、驚いていてもどうしようもないので、覚悟を決め引き戸を開けると……

引き戸を開けた先にはとんだ異世界でした。

「外装もさることながら中もこれほどひどいとは思わなかった。これを見てると廃校になった学校の方がずつとマシだろ。」

教室の隅には雲の巣が張っていて、下に敷かれている畳には所々腐っているものさえあった。驚きなどとうに飛び越えて（よくこんな設備を整えられたなあ）と、感心さえしていた。

「あんたが件の研究会にいる有明洋太郎か？」

あ、やせいのきんにくやろうがあらわれた！

「ああ、間違いない。」

出せる手持ちなどいるわけが無いので、素直に答えた。

「部活動の所属まで知っているってことはあんたがこのクラスの代表ってわけか？」

この学校では試召戦争の関係もあってか、クラス代表には顔写真と部活動などある程度の情報が与えられる。

「ああ、この俺がクラス代表の坂本雄二だ。」

どうやらこのデカイ筋肉が代表のようだ

「ところで席は自由席なのか？」

「ああ、そのようだ。」

しかしながら、席は既にある程度埋まっているようなので、廊下に程近い席に座った。

「わしは木下秀吉と申す、今年一年よろしくなのじゃ。」

「ああ、よろしく頼む。俺は有明洋太郎だ。」

目の前の少年？があまりにも女の子っぽい。聞いた話によると彼は女の子だとか秀吉は一つの性別なんだという声もあるが、そんなオカルトあるはずないため制服から判断し男だと認識した。

「一応確認だが、男だよな？」

「わしは男なのじゃ！」

秀吉がそう叫ぶと周りからはそんなはずはないだの秀吉は秀吉なんだのとかく秀吉が男であることを容認しない発言がみられた。ていうか、それしかない。

そろそろチャイムが鳴る頃に勢いよくドアが開いた。

「すいません、ちょっと遅れちゃいましたっ」

「早く座れ、このウジ虫野郎が。」

愛嬌を込めた挨拶した人に対し坂本は人間扱いをしなかった。いや、一応『野郎』といってるから人間として扱っているのだろう。

「聞こえていないのか、あ？」

さらにこの少年に追撃を放つような言葉を発した。

「雄二、なにやってるの？」

新学期なのに下の名前を知っている。それすなわち1年の頃からの付き合いがあったことを証明している。しかし、なんでそんな言い合いをしているのだろうか？と、考えていた時。

「えーと、ちょっと通してもらえますかね。」

覇気のない声によれよれのスーツといういで立ちの冴えないオッサンがクラスに入ってきて来た。

「はい。このクラスの担任の福原慎です。よろしくお願いします。」  
先生は黒板に自分の名前を書こうとしたが諦めざるを得なかった。  
この教室にはチョーク1本さえも無かったのだから。

「みなさんの席にちゃぶ台と座布団がありますか？何か不備があれば申し出て下さい。」

「ちゃぶ台と座布団で勉強させるのは、十分不備ではなからうか？」

「せんせー、俺の座布団に綿がほとんど入ってないです！」

「あー、はい。我慢してください」

「先生、俺の卓袱台の足が折れています」

「木工用ボンドが支給されていますので、後で自分で直してください」

「センセ、窓が割れていて風が寒いんですけど」「わかりました。  
ビニール袋とセロハンテープの支給を申請しておきましょう」

本当にここは、Fクラスに勉強させたいのだろうか？

「では、廊下側の人から自己紹介をしてください。」

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる。」

「有明洋太郎だ。試召戦争研究会に所属している。戦争の際には参謀総長に立候補するのでよしなに。」

俺が戦争の話をした際に坂本の頬が上がったのは気のせいだろうか？

「……土屋康太」

小柄な少年が名前だけを言ってさっさと座ってしまった。ふと見渡すと男ばかりであった。

「島田美波です。海外育ちで、日本語はできるけど読み書きが苦手です。あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は」

「……」  
今度は女子の声が聞こえた。流石にFクラス全員が男子のわけが無いようだった。

「趣味は吉井明久を殴ることです」  
特定の人物をターゲットにしたバイオレンスな趣味だった。

「はろはろ！」

島田が笑顔で手を振る相手は、坂本にウジ虫扱いされていた、男子生徒だった。

「……あう。し、島田さん」

「吉井、今年もよろしくね」

どうやらこの二人も1年の時同じクラスだったようだ。とりあえず『触らぬ神にたたりなし』を肝に命じておこうと思った。

「ーコホン。えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んで下さいね」

『ダアアーリイーン!!』

一瞬、俺も乗り気になったがこの大合唱には流石に引いた。

その後も自己紹介という名の時間潰しが続き、それも終盤に差し掛かった時のことだった。

「あの、遅れてすみま、せん・・・」

「えっ？」

教室全体から驚いたような声上がる。騒がしくなるクラスの中で担任の福原教諭がその姿を見て話しかけた。

「丁度よかったです。今自己紹介をしているところなので姫路さんもお願ひします」

「は、はい！あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願ひします。」

「はいっ！質問です！」

既に自己紹介を終えた男子生徒の一人が右手を挙げる。

「あ、は、はい。なんですか？」

「なんでここにいますか？」

聞きようによつては失礼な質問にあたるのだが、その相手が彼女の場合その質問に無理はない。なぜなら彼女 姫路瑞希は2年生の中でも常にベスト3には必ず入っているような人でまかり間違つてもFクラスに入ることなどない。故に彼女がFクラスにいる理由、それは……

「その、振り分け試験の最中、高熱をだしてしまいました・・・」



・  
」

そう、試験を受けなかった、あるいは受けられなかったかだ。まあ、むろん姫路は俺のように試験を休んだ訳ではないのだが。しかし、試験途中の退席は0点扱いの為結果は俺と同じという事だ。そんな姫路の言い分を聞き、クラスの中でもちらほらと言いつの聲が上がる。

「そう言えば俺も熱の問題が出たせいでFクラスに」

「ああ。科学だろ？アレは難しかったな」

「俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力を出し切れなくて」

「黙れ一人っ子」

「前の晩、彼女が寝かせてくれなくて」

「今年一番の大嘘をありがとう」

そんな中姫路は逃げるように吉井と坂本の隣の席に着く。まあ、こんなバカな空気に彼女は耐え切れなかったのだろう。

そんななかで、俺は席が遠いからあまりわからなかったが吉井が男から好意を抱かれていることがわかり、吉井は泣いていたがあまり気にはしない。ただ一つ分かったのは吉井にたいしては人間扱いなんてしていないということだった。

「はいはい。その人達、静かにしてくださいね」

と担任が教卓を軽く叩いて警告を発すると。

バキィツ バラバラバラ・・・

教卓が体を為しておらず、うずだかく木の板や棒が積み重なっているだけだった。

「えー……替えを用意してきます。少し待っていてください。」

福原教諭はそう告げると、教室から出て行った。本当にこんなんでいいのか？俺の中の常識も音を立てて崩れていくように思えた。姫路も苦笑いをしていた。笑って気分が晴れるなら俺も是非そうしたいものだった。ふと気がつくと、吉井と坂本が教室から出て行った。

廊下で聞き耳を立てているとなんか戦争とか姫路とかいう台詞が聞こえた。新学期すぐから戦争なのかと思い始めた。

担任と代表が戻り、自己紹介も再開した。須川のも終わり後は代表たる坂本のものだけであつた。

「坂本君、キミが自己紹介最後の一人ですよ」  
「了解」

先生に呼ばれて坂本が席を立つ。  
ゆつくりと教壇に歩み寄る姿は先程までのふざけた雰囲気は見られない。

「坂本君はFクラスの代表でしたよね？」

福原教諭に言われ、頷く坂本。最もクラス代表といつても最低クラスの成績者の中での一番に過ぎない。言わばお山の大將だ。AとBの境界ほどの成績の俺や、まして学年トップクラスの姫路に比べればその成績は遥かに劣るはずだが…

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺の事は代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ。さて、皆にひとつ聞きたい」

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが………不満はないか？」

「大ありじゃあつ！！」

Fクラスの魂の叫びが響き渡る、おおかた自業自得なんて言葉には聞く耳を持たないだろう。

「そこで俺は… Aクラス相手に試験召喚戦争を仕掛けようと思う。」  
坂本率いるFクラスは戦乱の道に足を踏み入れた。

## 第1問（後書き）

地の文は特にない場合は洋太郎の視点になっています。

感想等を待っています。

## 第2問（前書き）

バカテスト リーディング

問題：以下の英文を訳しなさい。

「This is bookshelf that my grandmother was used regularly」

姫路瑞希の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です。」

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

天王洲さくら・有明洋太郎の答え

「これは本棚で私の祖母が愛用していた物でした。」

教師のコメント

正解ですが、that以下の文は前にもっていった方がなお良いでしょう。

土屋康太の答え

「これは」

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか。

吉井明久の答え

「x」

教師のコメント

できれば地球上の言語で。

## 第2問

坂本はAクラスへの戦争を行おうとしている、しかし……

「勝てるわけがない」

「これ以上設備を落とされるなんて嫌だ」

「姫路さんがいたら何もいらない」

最後のものは除くとして当たり前前の反対意見が異口同音に出て来る。文月学園のテストは他の学校と一線を画している。それは、『制限時間内の問題数無制限。』その為、学力次第では、どこまでも点数を取ることができ、成績が優秀な者と低いものとの差がはつきりとなる。Aクラスの生徒の一人当たりの点数は大雑把に見てFクラススの生徒一人の3倍程、下手をすれば4倍にまでいく恐れがある。むろん召喚獣はテストの点に比例して強くなるのだから、その戦力の差は歴然だ。

「そんなことはない。この俺が勝たせる、いや勝たせてみせる。」そんな圧倒的不利にも拘らず、坂本はそう宣言した。そんな坂本の発言に対し、当然のことながらクラス内で否定的な意見が響き渡る。「根拠ならあるさ、このクラスには試召戦争で勝つ事のできる要素が揃っている。」

はてさて、どう言いくるめるのかな？姫路や俺を除けば基本的に戦力のスペックはFクラスなんだぞ。

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い。」

「……！！（ブンブン）」

「は、はわっ」

必死になり、顔と首を横に振って否定の意志を示しているが、あの体勢と頬についている畳の跡で間違いなく彼はクロである。

「土屋康太。こいつがあムッの有名な、寡黙なる性識者だ」

「……！！（ぶんぶん）」

土屋康太という名には余り聞き覚えがないが「ムツツリーニ」という通称は別である。その名は男子には畏怖と畏敬を、女子には軽蔑を以て挙げられる。まあ、授業以外の時間をわざわざ試召戦争の研究をしている俺にとつちやどうでもいい話ではあるが、他の男子生徒からはざわめきたっている。

畳の跡を手で自分で押さえる土屋。既にバレバレだが、異名は伊達じゃないようだ。

「姫路については言うまでもないだろう。」

「えっ、わ、私ですか？」

「そうだ、僕らには姫路さんがいるんだ。」

姫路は自分で驚いているが、学年次席あるいは三席をFクラスのエースと言わずして何と言おうか。

「木下秀吉だっている」

「おお・・・！！」

「ああ。アイツ確か、木下優子の・・・。」

確かに姉の木下優子は学年ベスト10レベルの人間だろうが、木下秀吉の名は聞かない。心配だったので一応確認を取った。

「なあ、木下。おまえは振り分け試験をちゃんと受けたよな？」

「うむ、そうじゃが、それがなにかあるのか？」

「いや、気にしないでくれ。」

「ところで有明よ。わしのことじゃが、木下と言われると姉上と間違える者が出て来る故、秀吉と読んでほしい。」

「了解した。俺の事も洋太郎と読んでもらって構わない。」

「わかったのじゃ。」

とりあえず、試験を最後まで受けたにもかかわらずFクラスだということとは姉と違い彼の学力はFクラス相当だということだ。

その間にも坂本が自分の事を言っていて過去に神童と呼ばれていたらしいが、Fクラス代表 お山の大將 程度では余り戦力にならない

いことは確かだ。

「それに、吉井明久だっている。」

あれだけ、ガヤガヤしていた教室が水を打ったように静かになった。  
「ちよつと雄二！どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！全くそんな必要はないよね！」

『誰だ、吉井明久って』

『聞いたことないぞ』

「ホラ！僕は雄二たちと違って普通の人間なんだからね」

「そうか。知らないようなら教えてやる。こいつの肩書きは《観察処分者》だ」

『それってバカの代名詞じゃなかったか？』

「ち、違つよつ！ちよつとお茶目な十六歳につけられる愛称で」  
ぶざまな言い訳をする吉井だが……

「そうだ。バカの代名詞だ。」

あつさり、坂本に切り捨てられる。

「肯定するな、バカ雄二！」

「あの、それってどういうものなんですか？」

バカとの等式に繋がる観察処分者の存在を知らない姫路が疑問の声をみせる。

「具体的には教師の雑用係だ、力仕事などを行うから、特例として試験召喚獣が物に触れることができるんだ。」

「そうなんですか？それって凄いですね。試験召喚獣って見た目と違って力持ちですから、そんなことができるなら便利ですね。」

「あはは。そんな大したもんじゃないんだよ」

姫路に褒められ吉井は謙遜する。

『おいおい。《観察処分者》ってことは、試召戦争で召喚獣がやられると本人も苦しいってことだろ？』

『だよな。それならおいそれと召喚できないヤツが一人いるってことになるよな』

そう、観察処分者は召喚獣の疲労や痛みの一部がフィードバックされる。故においそれとは召喚出来ないが、

「気にするな。どうせ、いてもいなくても同じような雑魚だ」

「雄二、そこは僕をフォローする台詞をいすべきだよな？」

坂本はやはり切り捨てた。

「そして、こいつがFクラスの秘密兵器<sup>ジョーカー</sup>有明洋太郎だ。」

『誰だそいつ？』

『こんなやつが秘密兵器なのか？』

俺のことなどそうそう知らないので、また疑問の声が響く。

「こいつはな、試召戦争研究会にいるんだ。言わばこのなかで誰よりも試召戦争について詳しい。そうたる？」

「まあな。放課後を全部試召戦争に使ってる奴なんてそうそういないからな。」

「それに、成績もAクラスレベルだ。」

「おいおい、買い被るなよ。せいぜいAのぎりぎり、下手すりゃBだぞ？」

「それでも問題ない。有明には参謀総長をやってもらいたい。いいか？」

『いいとも!!』

「じゃあ、決定だ。頼むぞ。」

「承知した、そのかわり俺の指示には従えよ。わかったな。」

「皆、この境遇は大いに不満だろう？」

『当然だ!!』

「ならば全員筆<sup>ペン</sup>を執れ！ 出陣の準備だ！」

『おおーっ!!』

Fクラスの団結力が頂点となった。

「明久にはDクラスへの宣戦布告の大使をやってもらっ」



「・・・下位勢力の宣戦布告の使者つてたいてい酷い目に遭うよね？」

当然の事であるが藪蛇なので、俺も坂本もそんな事はおくびにも出さない。

「大丈夫だ。ここは普通の学校だ。間違ってもそんなことない。」  
「本当に？」

「ああ。もちろんだ。俺は友人を騙すような真似はしない」

「わかったよ。それなら使者は僕がやるよ」

「ああ、頼んだぞ」

吉井明久「騙されやすい、いけにえには最適。覚えておこう。」

吉井はDクラスに向かって歩き出した。

.....

「騙されたあつ！」

「やはりそうきたか」

「やはりってなんだよ！予想通りじゃないか！」

「当然だ。そんなことも予想できないで代表が務まるか」

当たり前前の事である。

「少しは悪びれるよ！」

「吉井君、大丈夫ですか？」

「あ、うん。大丈夫。ほとんどかすり傷」

「吉井、ホントに大丈夫？」

「平気だよ。心配してくれてありがとう」

「そう、良かった・・・。。ウチが殴る余地はまだあるんだ・・・。。」

「ああっ！もうダメ！死にそう！」

姫路は吉井のことを心配していたが、島田のはただの追い撃ちである。

「そんなことはどうでもいい。今から屋上でミーティングを行うぞ。」

有明も来てくれ。」

「わかった。その前に飯を買わせてくれ。普段俺は学食だ。」

「了解した。なるべく早く来い。」

そういつて、坂本たちは屋上へと向かい、俺は昼飯を買いに行くのであった。

## 第2問（後書き）

感想を随時募集中です。

### 第3問(前書き)

バカテスト 数学

以下の問いに答えなさい。

「(1)  $4 \sin X + 3 \cos 3X = 2$  の方程式を満たし、かつ第一象限に存在する  $X$  の値を一つ答えなさい。

(2)  $\sin(A+B)$  と等しい式を示すのは次のどれか、?  
?の中から選びなさい。

?  $\sin A + \cos B$

?  $\sin A - \cos B$

?  $\sin A \cos B$

?  $\sin A \cos B + \cos A \sin B$

姫路瑞希の答え

「(1)  $X = \frac{\pi}{6}$  (2) ?」

教師のコメント

そうですね。角度を「 $^\circ$ 」ではなく「 $^\circ$ 」で書いてありますし、完璧です。

有明洋太郎の答え

「(1)  $X = \frac{\pi}{6}$  (2) きっと?」

教師のコメント

確信を持って下さい。

土屋康太の答え

「(1)  $X = \frac{\pi}{3}$ 」

教師のコメント

およそをつけて誤魔化したい気持ちもわかりますが、これでは解答に近くても点数はあげられません。」

吉井明久の答え

「（２）およそ？」

教師のコメント

先生は今まで沢山の生徒を見てきましたが、選択問題でおよそをつける生徒は初めてです。

### 第3問

屋上には、ミーティングのために俺と坂本の他に吉井、島田、姫路、土屋、そして秀吉がいた。

「すまない、一つ確認なんだが、なんで坂本（司令官）と俺（参謀総長）の他にこんなに人がいるんだ？指揮系統の人員が多すぎるのは余り良くないと思うが。」

「わかった。紹介しよう。土屋に関しては諜報という分野では右に出るものがないと思っている。姫路に関しては特に言うことは無いだろう。彼女無しでは作戦もなにもない。後の連中はいつもつるんでる奴らだ。こいつらには中隊長を任せようと思う。」

「了解。それなら特に異論はない。」

「明久。宣戦布告はしてきたな？」

「一応今日の午後に関戦予定と告げて来たけど」

「なら先にお昼ご飯ね？」

「おい明久、今日くらいはまともな飯食えよ？」

腹が減っては戦は出来ない。今も昔もこれは大差が無い。

「そう思うなら、パンでもおごつてほしいんだけど」

「えっ？吉井君ってお昼食べない人なんですか？」

「いや。一応食べてるよ」

姫路の質問に吉井は顔をそらし答えた。

「・・・あれは食べていると言えるのか？」

普段から人間扱いされていない坂本にまで憐れまれる吉井。

「何が言いたいのさ」

「いや、お前の主食って・・・水と塩だろう？」

あまりの栄養価の無さに絶句した。

「きちんと砂糖だって食べているさ」

反論をしているがそういう問題ではない。

「それは、食べると言うのだろうか？仕方ないから買ってきたおにぎりでもやるよ。」

「ありがとう、有明君。君は命の恩人だよ。」

100円程度のおにぎりでも命の恩人扱いされた。

「こんなもん100円位で買えるぞ。なんで飯食わねえんだ？」

「それは……………」

「……明久は食費までも趣味に使う。」

土屋からの確な解答が出て来た。

「……あの、よかつたら私がお弁当作ってきましようか？」

「え」

「落ちて着け明久、ここは平安時代じゃねえ」

「よいしいはこんらんしている！」

「本当にいいの？僕、塩と砂糖以外のもの食べるなんて久しぶりだよ！」

吉井の生命力はゴキブリ並なのか？

「はい。明日のお昼で良ければ」

「よかつたじゃないか明久。手作り弁当だぞ？」

「うん。やったあ！」

坂本のからかう声もわからず吉井は大喜びだ。

「……ふーん。瑞希つてずいぶん優しいんだね。吉井だけに作ってくるなんて」

島田の牽制球が放たれた。

「あ、いえ！その、皆さんにも……………」

「俺達にも？いいのか？」

「はい。嫌じゃなかったら」

「ほぼ赤の他人に近い俺でも構わないのか？」

「はい、参謀は頭を使いますから。」

いいはなしだなー。俺を含め7人分の飯を嫌な顔一つせずにつくる

んだから。

「それは楽しみじゃのう。」

「……（コクコク）」

「まあ、メシ代が浮くのはありがたい。」

「姫路さん。ずっと前から思ってたんだけど、僕は姫路さんの事を好き

「明久、今言つと弁当が無くなるぞ。」

にしたいと思いました。」

みんな目が点。

「明久、これでは唯の変態だとカミングアウトただけじゃぞ。」

「だって、お弁当が、お弁当が……」

吉井はカロリーの為なら恥をも厭わない。その証拠に姫路の顔は引き攣っている。

「雄二。一つ気になっておったのじゃが、どうしてDクラスなんじゃ？ 段階を踏んでいくならEクラスじゃろうし、勝負にでるならAクラスじゃろう？」

「そういえば、確かにそうですね」

秀吉と姫路がEクラスを飛ばした理由について質問していた。

「とりあえずEクラスを攻めない理由は簡単だ。戦うまでもない相手だからな」

「え？ でも、僕らよりはクラスが上だよ？」

「まあな。でも、オマエの周りにいる面子をよく見てみる」

明久はその場にいるメンバーを見回している。

「美少女が二人と馬鹿が二人とムツツリが一人、それに僕がよく知らない人が一人いるね。」

「誰が美少女だと！？」

「ええっ！？ 雄二が美少女に反応するの！？」

「……（ポッ）」

「ムツツリ二まで！？ どうしよう、僕だけじゃツツコミ切れない



！  
」

「落ちて吉井。そういう区分じゃねえ。いいか、Fクラスには姫路がいる。Eクラス程度なら姫路に回復試験受けさせれば、後はこり押しで十分だ。戦うだけ時間のムダだからだ。」

「だったら、最初から目標のAクラスに挑もうよ」

やはり、吉井はわかっていなかった。

「いや。姫路たちの準備ができてない以上、今Aクラスに挑んでも瞬殺されて終わりだ。仮に姫路と有明が万全でも無理だろう。」

俺の代わりに坂本が説明してくれた。

「それはどうということじゃ？」

「Aクラス50人中40人は問題はない。だけど、残りの10人がヤバいんだ」

「じゃあ雄二、Aクラスに勝つのは無理なんじゃ？」

「そのAクラスに勝つ為の布石がDクラス戦だ。そうだろう？」

「（ニヤリ）さすが、有明。その通りだ」

「お褒めに預かり至極光栄。」

坂本がみんなのほうを向き、みんなが坂本のほうを向く。

「いいか、お前ら。ウチのクラスは 最強だ」

雄二の声が響き渡り、みんなは無言で頷いた。

試召戦争の開幕戦、参りましょう。

### 第3問（後書き）

感想・要望を随時受け付けています。

#### 第4問（前書き）

バカテスト 物理

以下の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい。  
「光は波であつて、（ ）である。」

姫路瑞希の答え

「粒子」

教師のコメント

よくできました。

土屋康太の答え

「寄せては返すの」

教師のコメント

君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え

「勇者の武器」

教師のコメント

先生もRPGは好きです。

有明洋太郎の答え

「キングダムハーツの主題歌である宇多田ヒカルの曲」  
教師のコメント

よく、解答欄にその文字数を埋めましたねえ。

## 第4問

PM1:00 Dクラスとの戦争の火ぶたが切って落とされた。

「いいか、姫路。おまえはこの計画での要だ。1点でも多く点を稼いでくれ。」

「わかりました。でもそれなら有明君にもやってもらった方が良いでしょうか？」

「いや、有明は必要ないと思っている。」

「ついでに言えば、今回の作戦は端的に言えば姫路のための時間稼ぎに過ぎない。また、坂本は俺を隠し玉として扱い、次の試合から主戦力として使っらしい。」

「はい、ありがとうございます。皆さんの為にも頑張ります。」

「ああ、そうしてくれ。」

そうして、俺は次の戦争のため、姫路はこの戦争のけりをつけるために回復試験に臨むのだった。

### 中堅部隊

中堅部隊には吉井・島田中隊長の下に20人が集っていた。

ここからは明久の視点でお届けします。

僕と島田さんが率いる中堅部隊は、先行部隊の少し後方で待機している。与えられた任務は前線維持と時間稼ぎだ。

「吉井！Dクラスの援軍が到着したみたいよ」

「うん。そうみたいだね」

『戦死者は補習ううー！』

ドスのきいた声が廊下に響きわたる。あれは鉄人の声だな。間違いない。

「島田さん、中堅部隊全員に通達」

「ん、なに？何て伝えんの？」

「総員退避、と」

「この意気地なし！」

殴られた。しかもチョキで。

「目が、目があー！」

某大佐みたいな呻き声を上げる。うう、あれでも直接攻撃じゃなかったのに。

「目を覚ましなさい、この馬鹿！アンタは部隊長でしょう！臆病風に吹かれてどうするのよ！ウチらの役割を忘れちゃったの？吉井？」

「ごめん。僕が間違っていたよ。補習室を恐れずに僕らの役割を全うしよう！」

「ええ。多対一の状況をうまく作れば、そう簡単には死なないわよ。」

「そうだね。よし、やるぞ！」

「うん、その意気よ、吉井！」

拳を挙げる僕達。大丈夫、僕らならやれる！

「隊長、前線部隊が撤退を始めたぞ。」

「総員退避よ」

今度は島田さんが臆病風に吹かれたようだ。

「さっき言ってることと違うよね。」

「総員退避で問題ないわよね？」

島田さんは笑顔かつ低い声で答えた。うう、島田さん笑顔が怖いよ。

「よし、逃げよう。僕らには荷が重すぎた」

「そうね、ウチらには精一杯努力したわ」

何もしていないけれども、僕は自分の命のほうが大事だし……。

すると、本陣にいるはずの横田君がこちらに走ってくる。なんだろう？  
「代表より伝令があります。」

横田君は僕たちに雄二からの伝令を伝える。

「あ、吉井。代表が最後に『逃げたらクロス』だ、そうだ」

「全軍突撃しろぉーっ！」

僕たちは気が付いたら戦場の最前線へ向って全力ダッシュしていた。

「明久、援軍に来てくれたんじゃない！」

「秀吉、大丈夫？」

「うむ。と言いたいところじゃが、正直旗色が悪い」

僕らが到着した時には、十五人いた先行部隊が秀吉を含めて四人まで減っていた。

「厳しいね。とにかく、秀吉たちは補充試験を受けてきて、このままだと全滅になっちゃうし。前線は僕たちにまかせてよ。」

「すまぬが、頼むのじゃ。」

秀吉たちは補充試験を受ける為教室へ向け走っていった。

フィールドは化学の布施先生・五十嵐先生、そして、総合科目で学年主任の高橋女史だ。

「島田さん、化学の自信は？」

「全くなし。60点台常連よ。」

「うん、やっぱり学年主任のとこまで行って勝負するしかないみたいだね」

「そつみたいね」

僕らは気づかれないように壁際を歩き学年主任である高橋先生のところを目指した。

しかし、

??「あつ！そこにいるのはもしや、美波お姉さま！五十嵐先生、こっちに来てください！」

島田さんが清水さんに見つかってしまつ。くっ、仕方ないここは………。

「よし、島田さん、ここは君に任せて僕は先を急ぐよ！」

「ちよつ・・・！普通は逆じゃない！？『ここは僕に任せて先を急げ』じゃないの！？」

「そんな台詞、現実世界じゃ通用しない！」

「よ、吉井！このゲス野郎！」

僕だつて鉄人の補習なんて受けたくない！

「お姉さま！逃がしません！」

「くつ、美春！やるしかないってことね・・・！！！」

「『サモン試獣召喚』」

Subject: Chemistry

Class F

Name: Minami Shimada

Score: 53

VS

Class D

Name: Miharu Shimizu

Score: 94

二人の召喚獣は武器を構えて正面からぶつかり合った。しかし、鎧迫り合いを繰り広げるが、島田さんの召喚獣が力負けして獲物を取り落とし、相手の刀を喉元に突き付けられた。というか島田さん、点数サバ読んでたな。60点なんていってないじゃないか？

「さ、お姉さま。勝負はつきましたね？」

「い、嫌あつ！補習室は嫌あつ！」

「補習室？・・・フツ。この時間ならベツトは空いていますからね」

あれ？清水さん補習室はそっちじゃないよ？そっちにあるのは保健室だけど・・・。

「ま、待て！清水さん！」

「ん？何ですか？美春とお姉さまの邪魔をする人は、全員殺します」

「……失礼しました。」

ダメだ叶いつこない。

「アキ！なにやってるのよ！」

「ごめん、やっぱり島田さんに任せるよ。」

「誰か、助けて。」

島田さんの悲鳴が聞こえるが僕は先に進もう。死して屍を拾うものなしかから。

「あぶないつ。<sup>サモン</sup>試獣召喚」

Subject: Chemistry

Class F

Name: Ryo Sugawa

Score: 76

VS

Class D

Name: Miharuru Shimizu

Score: 54

間一髪、須川君の召喚獣が清水さんの召喚獣を倒してくれた。

「……アキ……」

「……記憶にございません。」

「あんた、ウチのこと見捨てたわね！」

「ああ、島田さんが錯乱状態になった。誰か島田さんを止めて。」

「落ちて着け島田！吉井は味方だ！」

「須川君！早く島田さんを本陣まで！」

須川君が体を張って島田さんを運んでくれた。ふう、悪は去った！

その後も、先遣部隊が合流して、僕たちは善戦していたがやはり個人の力で劣るFクラスは一人、また一人と戦死していく。

「隊長、Dクラスが教師の数を増やそうとしている。」



「うーん。雄二に相談をしてくれないかな。雄二ならいいことを考えてくれるはずだよ。」

しばらくすると、校内放送が流れた。雄二の作戦だろう。

《連絡いたします。船越先生。体育館裏にて吉井明久君がお待ちです。生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです。》

今なら僕は人を殺める事も出来ると思った。

吉井視点終了

洋太郎の視点に戻ります。

《連絡いたします。船越先生。体育館裏にて吉井明久君がお待ちです。生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです。》

まさか、ここまでやるとは。船越先生は婚期をとくに過ぎていて、生徒に数学の単位と引き換えに交際を求めるまでになったほどだ。これなら船越先生は一晩中だって待つだろう。吉井の人生には申し訳ないが。

「さて、姫路に有明。回復試験は済んだか。」

「はい、バッチリです。」

「まあ、戦争に使っている科目はな。」

「んじゃあ、そろそろ出るぞ。」

「でもDクラスの代表さんも護衛を引き連れていると思いますよ。」

「まあな。でもなあ、姫路瑞希はAクラスにいるのが当たり前だとDクラスの連中は思っている。そうだろ、坂本。」

「正解だ。今はAクラスの奴らも下校し始めている。それを狙うんだ。姫路はあくまでも下校しているそぶり代表の平賀だけを狙え。有明は本隊に合流してもらおう。」

ようやく、戦場に立てる。この高揚感でいっぱいだった。

俺達が戦場にきたときには既に放課後であり他クラスもちろほら見られる。既にDクラスの代表である平賀の姿も見られる。一方Fクラスは下校に紛れてのゲリラ戦を展開している。

「坂本、どいつを殺ればいい？」

「とりあえずあそこにデカイやつがいるだろ。あれが部隊長を務める塚本だ。あいつを頼む。」

「了解。」

俺は塚本のところに行く途中秀吉に会った。

「秀吉、あれが塚本か？」

「うむ。今の科目はライティングでの、わしは苦手なのじゃ。」

「わかった。ライティングなら何とか行けるな。」

「Fクラス有明洋太郎。あんたに挑むぜ試獣召喚！」

「試獣召喚！」

Subject: Writing

Class F

Name: Youtaro Ariake

Score: 158

VS

Class D

Name: Kouichi Tsukamoto

Score: 129

塚本の得点はDクラスにしてはやや高い。装備はスタンダードな両刃刀に鎖帷子だ。それに対し俺の装備はというと……

「洋太郎よ！お主の装備は明久よりひどいではないか！」

Tシャツ短パンにローブを羽織り、Fと描かれた首輪を付け、武器は短い木の棒だった。

「何を構えてみれば、とんでもないクズ装備じゃないか！今楽にしてやる。」

塚本はその装備の軽さから弱いと判断し、ダッシュをして突撃を仕

掛ける……

「10点を消費し、ツヴァイアロー。」

そう呟くと召喚獣が木の棒を振り、2本の矢をダッシュ中の塚本に放つ。召喚獣の操作にはあまり慣れていないのか急には止まらない塚本の召喚獣はその攻撃を頭と腹部にもろに喰らい、

Score 1290 あっさり戦死した。

『戦死者は補習うー！』

どこからともなくMr.西村がやって来て塚本を補習室へと連れていった。

指揮系統を失ったDクラスが早々に立ち直るわけもなく、みな混乱していた。その隙だったろうか？姫路が大剣で平賀の召喚獣を一刀両断していた。

Fクラスは、見事開幕戦を勝利で飾った。

#### 第4問（後書き）

感想・要望等待ってます。

次回予告ってやるべきだろうか？

## 第5問（前書き）

バカテスト 物理

問題：X線を発見した、第1回ノーベル物理学賞受賞者は誰でしょう？

天王洲さくらの答え

「ヴィルヘルムⅡレントゲン」

教師のコメント

正解です。

吉井明久の答え

「キュリー夫人」

教師のコメント

恐ろしく普通なのでびっくりしています。キュリー夫人は夫のピエールとともに放射線の研究でノーベル物理学賞を取っています。

有明洋太郎の答え

「川端康成」

教師のコメント

……物理学賞ですよ。

## 第5問

Dクラス代表平賀源二討死

『か、勝った！勝ったぞおおおーっ！』

『うおーっ！』

Fクラスかちどきの勝鬨とDクラスの悲鳴が混じり廊下に響き渡った。

『凄えよ！本当にDクラスに勝てるなんて！』

『これで畳や卓袱台ともおさらばだな！』

『坂本雄二サマサマだな！』

『やっぱりアイツは凄い奴だったんだな！』

『坂本万歳！』

『姫路さん愛してます！』

雄二を褒め称える声（最後のは明らかに違う）がいたるところから聞こえる。

『あー、まあ。なんだ。そう手放して褒められると、なんつーか』

『坂本！握手してくれ！』

『俺も！』

完全に英雄扱いの坂本に限らず、他のクラスメイト達もあの教室に相当不満があつたようだ。

そんな風に思いながら眺めていると、吉井が坂本に近づいてきた。

『雄二！』

『ん？明久か』

坂本が振り向く。そこへ、吉井が駆け寄って、

『僕も雄二と握手を！』

手を突き出す。

『ぬおお！』

ガシッ

『雄二……！どうして握手なのに手首を押さえてるのかな……！』  
『押さえるに……決まっているだろうが……！フンッ！』

そんな訳がない。きつとなにかあるから手を押さえているんだ。

「雄二、皆で何かをやり遂げるって、素晴らしいね」

「……」

「僕、仲間との達成感がこんなにもいいものだなんて、今まで知らな間接が折れるように痛いっ！」

「今、何をしようとした」

多分、坂本の手首を曲げようとした。

「も、もちろん、喜びを分かち合うための握手を手首が痛いっ！」

「おーい。誰かベンチを持ってきてくれ！」

「す、ストップ！僕が悪かった！」

「…チツ」

坂本は舌打ちをして吉井を解放する、この二人は試召戦争が終わったというのにいつまで争っているつもりなんだ？しかも、仲間同士で。あのまま続けば、吉井の生爪は坂本のベンチにより剥がされていたかもしれない。

「……ブツブツ……」

すると、坂本が何かをつぶやきはじめる。

「……生爪……」

俺の予想は正解のようだった。

『あはははは』

Fクラスの皆から笑顔と笑い声が自然と溢れ、勝利の喜びを味わっている。

そこに、Dクラスの代表の平賀が雄二にヨタヨタと歩み寄ってきた。平賀「まさか姫路さんがFクラスだなんて………信じられん」

「あ、その、さっきはすいません………」

「いや、謝ることはない。全てはFクラスを甘く見ていた俺たちが悪いんだ。ルールに則ってクラスを明け渡そう。ただ、今日はこん

な時間だから、作業は明日で良いか？」

「もちろん明日で良いよね、雄二？」

しかし、坂本からは予想外の（俺にとっては当然の）答えが返ってきた。

「いや、その必要はない」

「え？なんで？」

「Dクラスを奪う気はないからだ」

「雄二、それはどういうこと？」

他のFクラスのメンバーも明久と雄二の会話に耳を傾けていた。

「忘れたのか？俺達の目標はあくまでもAクラスのはずだろ？それに、この戦いは、あくまで打倒Aクラスの為の布石だと言ったはずだ。そして、設備を交換しない理由は大きく三つある」

今回は説明を坂本に任せてしまおう。

「理由？」

「一つ目は、Dクラスの設備に満足して、今後の試召戦争への影響を無くす為、つまりモチベーションの維持が目的。二つ目は、召喚獣の扱いに慣れる為。」

「あつ、なるほど。だけど、もう一つは？」

「三つ目は、次のBクラス戦の為の下準備だ。」

「え？Bクラス戦？今度はBクラスと戦うの？」

吉井だけではなく、他のメンバーも疑問符を浮かべている。

「とにかく、設備の交換はするつもりはない。ただし条件がある」

「一応聞かせてもらおうか」

理由の説明を終えた所で坂本は平賀との交渉に移った。

「大したことではないさ。そのベランダに置いてあるBクラスの室外機を俺が合図したら使用不能にして欲しい」

「それだけでいいのか？」

「当然、設備を壊すんだ教師に睨まれると思うけどな」

「それくらいなら構わないさ」



「交渉成立だな」

Dクラスとの交渉も終了し、今日は解散ということになった。

「さて、これからは俺の時間だ。今日のデータを見ておきますか」  
試召戦争の様子は学園側で録画をしている。それを借りて我が試召戦争研究会は、試召戦争を見ている。いつもならもう一人いるのだが他の事があつたのだらう。今日はいなかった。

「おお、まさか観察処分者があそこまで活躍するとはな。」  
正直な所驚いた。観察処分者（バカの象徴）である吉井明久がここまで活躍するとは、点数では断トツで低く、しかも装備は改造制服に木刀と無いにも等しいレベルだがDクラスを圧倒していた。単純な点数比べじゃないところに試召戦争の面白みがあるのだが、ここまで掻き回してくれるとは。吉井明久の戦力を上方修正して、家に帰った。

翌日、先日のDクラス戦で消費した点数を回復していた。一限の試験監督がMs・船越だったため吉井は人生の危機に陥っていたが事なきを得たようだった。そういえば、今日は姫路が昼ご飯を作ってくれるのだが……

「昼飯食いに行くぞ。今日はラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすっかな」

「ん？食堂に行くの？だったら一緒にいい？」

「ああ、島田か。別に構わないぞ」

彼らは忘れているようだった。

「あ、あの。皆さん……………」

「うん？あ、姫路さん。一緒に学食に行く？」

「あ、いえ。え、えつと・・・、お、お昼なんですけど、その、昨日の約束の・・・」

「おお、もしやお弁当かの？」

「は、はい」

と言つて、身体の後ろに隠していたバックを出してくる。さすが7人分だけあつてデカイ。

「それでは、せっかくのご馳走じゃし、屋上で頂くとするかろう」

「そうだね。」

「はい。みなさんの分もあるので大丈夫です」

「そうか。それならお前らは先に行つてくれ」

「ん？雄二はどこか行くの？」

「飲み物でも買つてくる。昨日頑張ってくれた礼も兼ねてな」

「あ、それならウチも行く！一人じゃ持ち切れないでしょ？」

「悪いな。それじゃ頼む」

二人は教室を出て行つた。俺を含めた、残りの面々は屋上へと向かつた。

みんなは姫路さんの持つてきたビニールシートの上に足を投げ出し、各々くつろいでいる。

「あの、あんまり自信はないんですけど・・・」

『おおっ！』

俺らは姫路さんのお弁当に一斉に歓声をあげた。よくこれを作り上げたなあと思う程の量。俺が作るのなら丸一日かかると思う。料理は好きだし周りからは評判なのだが、いかんせん凝つてしまい時間がかかる。故にいつもは昼飯は学食なのだ。

「それじゃ、雄二には悪いけど、先に」

「・・・（ヒョイ）」

「あつ、ずるいぞムツツリーニ。」

素早い動きでムツツリー二がエビフライをつまみ取り、流れるように口に運び

「……………（パク）」

ボタン　ガタガタガタガタ

俺ら3人は顔を見合わせた。何が怒ったのか？

「わわっ、土屋君」

姫路さんが慌てて、配ろうとしていた割り箸を取り落とす。  
ムクリ

土屋は起き上がった。

「……………（グッ）」

ムツツリー二は姫路さんに向け親指を立てた。

「あ、お口に合いましたか？良かったですっ」

そんな土屋の反応に姫路さんは喜んでいる。

足が未だガクガク震えているのはどうしてだろうか？まるで、KO寸前のボクサーみたいだ。

「良かったらどんどん食べてくださいね」

そんな笑顔で勧めてくると断れない。しかしながら、命を大事にしたい俺はこう言おうとした。

「姫路、その料理のレシ……」

「あ、UFO！」

「え、どこですか？」

吉井（バカ「フェミニスト」）が遮りやがった。

少年アイコンタクト中…

（おい、なにをしてくれた。）

（ダメだよ、有明君。これを言ったら姫路さんが傷ついちゃうよ。）

（姫路は女子ゆえ、かわいそうなのじゃ。）

（おまえら、死にたいのか？今のうちに問題を解決しておかないと姫路はますます料理という名の殺戮兵器を生み出すぞ。おまえらの

やっていることは問題の先送りに過ぎない。俺は現実を話す。）俺は意を決して姫路に残酷な現実を告げようとしたときだった。

「おう、待たせたな！へー、こりゃ旨そうじゃないか。どれどれ？」

坂本（フェミニストその2）が登場した。

坂本（フェミニストその2）は素手でウインナーを口に放り込み、パク……ボタン　ガシャガシャン、ガタガタガタガタガタジューズの缶をぶちまけて倒れた。ありがとう。おまえの犠牲は忘れない。しかし、確信した。コイツは、本物だ。しかも、ウインナーだけであの威力。どうやったら、ウインナーを殺人兵器に調理できるんだろうか？ただ油を引いて焼くだけなのだが

「あ、足が………攣ってな………」

「そうなの？坂本ってこれ以上ないくらい鍛えられてると思うけど、いい加減にしろ、と正直思っていた。

「島田さん。その手の辺りにさっきまで虫の死骸があったよ」

「ええっ！？早く言つてよ！」

「ごめんごめん。とにかく手を洗ってきた方が良いよ」

「そうね。ちよつと行ってくる」

あのバカがリスクを高めやがった。

もう付き合つてられない

「姫路、おまえの料理のレシピを見せてくれ。」

「あ、はい。どうぞ。」

吉井達は何をしているんだ。というような顔で睨みつけていたが、そんなの関係ねえ！レシピを一読……せずとも分かった。何故調味料に塩酸やら硝酸やら、クロロ酢酸とかがあるのだろうか？

確認をこめて他のレシピも見たが喜ばしい（？）ことに、このお弁

当に安全地帯など無かった。味見をしたのだろうか？やら、薬品は調味料じゃない！とか言いたいことは多々あるがまずはこれだけ言っておこう。

「姫路、おまえの料理は料理じゃなくて唯の殺戮兵器だ。」

「……………えっ。」

姫路は驚いているようだが、俺は更にこういった。

「姫路、普通の料理だったら食べてすぐに人は倒れない。」

「えっ、でも頼っぺたが落ちるほどおいしいって言いますよ。」

「それは慣用句だ、実際美味しいもの食って頼っぺた落ちたことがあるか？」

「ないですね。」

「だろ、っと話が逸れたな。とりあえず、料理に薬品はつかうな。塩酸や硝酸とかは人間の口には入れてはいけない。」

「そうなんですか、ごめんなさい。」

家で料理の基本（っていうか人間の基本）を習わなかったのか？

「まあ、俺に謝るより土屋や坂本に謝ろうな。」

「そうですね。」

「そういえば雄二、次はBクラスと戦うんだよね？」

「そうだが、それがどうした？」

今は犠牲になった人たちも皆復活を遂げ、のんびりお茶をすすっている。お茶には殺菌成分カテキンとかが含まれているので、坂本と土屋には大量に飲ませている。

「この前、Bクラス戦はAクラスに勝つために必要だと言ってたけど、一体どういうことなの？」

「うむ、それはワシも気になっておったところじゃ」

「正直に話そう。俺たちはAクラスに勝てない。」坂本が不都合な真実を口にした。

「え！？じゃあ僕たちの目標はBクラスってこと？」

「いいや、そんなことはない。Aクラスをやる」

「どういうことじゃ？話がみえんのじゃが」

「クラス単位では万に一つ勝ち目はない。その理由は…有明、頼む」  
「任された。ぶっちゃけた話Aクラスのトップ10が厄介過ぎる。」

まあ、そのうちの1人が姫路だから、今Aクラスには9人だが、その十人は全員が腕輪持ちだ。」

皆は絶句していた。

「そこでだ、勝負の内容を一騎討ちにするんだ。その交渉材料にBクラスを使う。順を追って説明する。まず、Bクラスに勝利し、設備交換を行わずAクラスに対して試召戦争の準備ができていと伝えてもらう。そして、俺たちがAクラスに宣戦布告するときに一騎討ちという条件が拒否された場合、BクラスをAクラスへ攻め込ませ、その勝負の直後Fクラスと戦ってもらうといった具合に交渉する。」

「とにかくBクラス戦だ。細かいことはこの後教えてやる。Bクラス戦のポイントは三つ。まず一つ目だが、開戦早々の渡り廊下戦に素早く勝利し、戦場をBクラスの教室の入り口にすること。」

「どうして、Bクラスの教室の入り口なの？」

島田がわからないらしく問う。

「これには、参謀として俺が答えよう。教室の入口にするのには重要な理由がある。教室の入り口で戦闘を行うのは、向こうの連中に戦闘を広範囲で展開されるのを防ぐ為。Dクラスと違って弱点を突いても、元々の能力が違う、あちこちで救援を求められても対応するのが難しい。そこで、戦闘範囲を限定する。廊下と教室前だったら明らかに戦場ににくいのは教室前だろ？」

「なるほどね。教室の入り口なら戦闘は教室の前と後ろの二箇所のみになるわね」

「次に二つ目だが、Bクラスの連中は文系よりのヤツがほとんどだ。そこで、教科を数学、物理、化学主体で攻める。」

「また、島田さんの出番だね」

「そうね。前はあまり活躍できなかったから、今度こそがんばるわ」

「どうやら、島田は理科系が得意らしい。」

「すまない坂本。俺は理科系科目が弱い。今回も本部待機になりそうだ。」

「了解した。しかし、最初の制圧戦には出てもらいたい。構わないか？」

「ああ、魔法召喚獣だから、あまり長くはいられないがな。」

「魔法召喚獣とは何なのじゃ？」

「まあ、武器が魔法の召喚獣だと思ってくれれば構わない。」

「わかったのじゃ。」

「おい、明久」

「ん？」

「今日のテストが終わったら、Bクラスに宣戦布告して来い」

「断る。雄二が行けばいいじゃないか」

「やれやれ。それじゃジャンケンで決めないか？」

「ジャンケン？」

「OK。その代わり心理戦ありでいこう」

「いいぜ」

吉井が坂本（司令官）に心理戦で勝てる訳が無い。  
バカ

「よし。じゃあ僕はグーを出す」

「そうか。それなら俺は、お前がグーを出さなかったらブチ殺す」

その発想はなかった。

「いくぞ、ジャンケン」

「わああっ！！」

坂本がパーで吉井がグー

「決まりだ。逝って来い」

「絶対嫌だ！それに『逝って来い』って字が違っし、それだと僕が死ぬの確定みたいじゃないか！」

「おつとすまん。行つて来い。これでいいだろ？」

「そういう問題じゃない」

「Dクラスの時みたい殴られることを心配しているのか？」

「それもある！」

「ていうか、それだろ」

「それなら今度こそ大丈夫だ。なんせBクラスは美少年好きが多いからな」

「そつか。それなら確かに大丈夫だね」

「でもお前ブサイクだし……」

「失礼な！365度どこからどう見ても美少年じゃないか！」

「5度多いぞ」

「実質5度じゃな」

「一周回つてどうするつもりだ。」

「みんな、嫌いだー！」

その後当然のように吉井はボロボロになって宣戦布告を済ませた。



## 第5問（後書き）

オリジナルのバカテストを作ってみました。  
感想くれるとうれしいです。

## 第6問（前書き）

バカテスト 化学

問題：ベンゼンの化学式を答えなさい。

姫路瑞希の答え

『C 6 H 6 』

教師のコメント

正解です。簡単でしたかね。

土屋康太の答え

「ベン+ゼン=ベンゼン」

教師のコメント

君は化学を舐めていませんか？

吉井明久の答え

『B E N Z E N 』

教師のコメント

後で土屋君と一緒に職員室に来るように

有明洋太郎の答え

『C 6 H 5 C H 3 』

教師のコメント

それはメチルベンゼンです。

## 第6問

休み時間終了のベルが鳴り響きBクラスとの試召戦争が開始される。我らはもの凄い勢いで教室から飛び出し、戦場へ向かった。今回は最初のうちは参戦し、途中からは本部待機に回る。

渡り廊下

『いたぞ、Bクラスだ!』 高橋先生を連れているぞ

正面から十人程度の生徒がゆつくりと歩いてくる。様子見だろう。こっちは、四十人も渡り廊下戦に投入している。ここは一気に勝負をつけて教室まで攻め込みたいところだ。

「向こうは十人程度しかない囲んで一気に勝負を決めよう!」

『おおーっ!』

本来指揮を取るのは姫路なのだが、いかんせん運動能力が低く到着するまでは、吉井が代理で指揮をしている。

Subject: Total

Class F

Name: Yoshimune Kondo

Score: 764

VS

Class B

Name: Nagao Nonaka

Score: 1943

Subject: Math

Class F

Name: Keita Muto

Score:69

VS

ClassB

Name:Yuko Kindaichi

Score:169

Subject:Physics

ClassF

Name:Takumi Kimijima

Score:74

VS

ClassB

Name:Mayuko Satoi

Score:159

やはり、Dクラスとは異なり一人一人での得点差が激しい。俺も出向くでしょう。物理や数学は余り得意ではないので総合科目でいこうと思う。

「試獣召喚!」

Subject:Total

ClassF

Name:Yotarou Ariake

Score:2002

VS

ClassB

Name:Norie Ishihara

Score:1879

相手はBクラスでは、まずまずの点数のようだがコストとして使う点数が多いときこそ、魔法召喚獣の真価が発揮される。

「50点を消費して、クラウド」

『2002 1952』俺の召喚獣が杖を一振りすると、黒い雲が

出てきて敵の召喚獣を襲う。

『1879 883』だいたい1000点近く削れたようだ。それに加え、どうやら召喚獣は麻痺をしたらしくふらふらしている。姫路もやってきて腕輪でBクラス生徒を蹂躪し始めた。俺はあまり点数を消費したくはないため、止めを近くにいた大下『752』と手塚『720』に任せ、本陣へと帰った。

Fクラスへと戻ったが、クラス内の光景は余りにも変わっていた。誰もいない教室。穴だらけの卓袱台に、へし折られたシャーペンと消しゴム。『教室をめっちゃめっちゃにはいけない。』なんてルールはないため問題は無いが倫理的によろしくは無いと思う。

「酷いね。これじゃ補給がままならない」

「うむ。地味じゃが、点数に影響の出る嫌がらせじゃな」

「あまり気にするな。修復に時間はかかるが、作戦に大きな支障はない」

吉井と秀吉も戻って来たらしく相談していたところに、代表たる坂本が戻って来た。

「坂本、これは一体どういう事だ？」

「協定を結びたいという申し出があつてな。調印のために、教室を空にしていた」

「協定じゃと？」

「ああ。4時までに決着がつかなかったら、戦況をそのままにして続きは明日午前9時に持ち越し。その間、試召戦争にかかわる一切の行為を禁止するつてな」

「それ、承諾したの？」

「そうだ」

「どうしてだ。せめて参謀の俺にくらいは相談してもよかったはずだが」

俺の文句に吉井と秀吉も頷く。

「すまない。急を要する事態だったから戦線にたつおまえに相談出

来なかった。とりあえずは姫路の為だと言っておこう。今回もクラス全体と言うより姫路の個人戦力がカギとなる以上、乗った方が勝率が高くなる事は事実だ。いくら代表がああ根本だと言っても。根本と言えば悪党でこの俺にも知られているほどだ。

「とりあえず、吉井と秀吉は戦線に戻ってくれ。補給は俺と坂本で何とかしておこう。」

吉井と秀吉を戦線に返し、俺は掃除用具入れを開けてゴミ袋に入れてカモフラージュしておいた。筆記用具を出して置く。

「一応補給については何とかしたが、どうするか。代表？」

「いや、とにかく待ちの一手だ。お前はこのメンツのNo.2だ。いなくなると護衛がヤバイことになる。」

「了解。」

こうして、戦線は膠着したまま、16時を迎えた。何とか前線はBクラスの教室前に持っていけたが、こちらもそれ相応の犠牲を払った。なぜか吉井は本当に死にかけていたが、別にどうでもよかったので無視した。

「坂本、どうだ。俺としてはまあまあ削れた方だと思うが……」

「そうだな。明日も姫路に頑張ってもらうより他はないな。」

「……………」

「ん？ ムツツリーニ。何か変わった事があったか？」

「……………（コクリ）」

何か土屋が情報を持ってきたようだ。彼は今回出番が来るまで情報収集にいそしんでおり、警戒に当たっている。

「Cクラスが、試召戦争の準備を？」

「……………（コクリ）」

「狙いはAクラスじゃないだろうから……大方、漁夫の利を狙うつてところか？」

「んー、そういうことならCクラスと協定でも結ぶか。俺達が勝つとも思っていないだろうし、Dクラスを使えば難しい事でもないだろ

う」

坂本がCクラスとの協定を結ぶつもりのようなだが、何か引掛かる。

「ちょい待ち。土屋、BクラスとCクラスが手を結んでいることは考えられるか？根本が嵌めている可能性も否めない。」

「……調べてみる。少し待ってくれ。」

しばらくして土屋が戻ってきた。

「……有明の予想通り。Bクラスの根本とCクラスの小山は付き合っている。」

「了解。坂本、Cには行くな。しかし、どうしようか？これでは連戦になってしまい余りよろしくない。」

「有明、その点は大丈夫だ。取っておきの策がある。」

どうやら坂本には秘策があるようなので、これは坂本に任せて今日のところはお開きになった。

## 第6問（後書き）

少々短いですが、これで投稿させていただきます。  
感想待ってます。



## 第7問（前書き）

バカテスト リーディング

次の問いに答えなさい。

「good および bad の比較級と最上級をそれぞれ答えなさい」

姫路瑞希・有明洋太郎の答え

「good - better - best  
bad - worse - worst」

教師のコメント

その通りです。

吉井明久の答え

「good - gooder - goodest」

教師のコメント

まともな間違え方で先生驚いています。

good や bad の比較級と最上級は語尾に -er や -est をつけるだけではダメです。

覚えておきましょう。

土屋康太の答え

「bad - butter - bust」

教師のコメント

「悪い」「乳製品」「おっぱい」

## 第7問

「今から昨日言った作戦を実行する。」

「作戦って、Cクラス対策のか？」

「ああ、その為には、秀吉にこいつを着てもらおう。」

現在8時半、Bクラスとの戦争再開にはまだ30分ほど早い。

教壇に立ち、そう宣言した坂本は文月学園の女子制服を取り出した。

「それは別に構わんが、ワシが女装してどうするんじゃ？」

そこは構うべきだ。

「秀吉には姉の木下優子になりすまして貰ってCクラスを挑発、攻撃の矛先をAクラスに向けさせる。面識がないCクラスでは見破る事は不可能だ。」

聞くところによると、姉の木下優子と弟の木下秀吉は二卵性双生児だが、パツと見では家族ですら見分けがつかない程似ている。男と女の兄弟が似ていることなど滅多に無いと思うが、常識を足蹴にしているこの学園では十分有り得ることだろう。

「と言う訳で秀吉、用意してくれ」

「う、うむ……」

坂本から制服を受け取り、その場で着替え始める秀吉。

明久をはじめとするFクラス男子は、その着替えの光景に絶句。

ムツリーニもすごい速さでカメラのシャッターを切り、その光景に釘付けとなる。

かくいう俺も不覚ながらここまで魅力的な『同性』の着替えを見たことはなかった。普通同性の着替えに魅力など無いはずだが、秀吉には何かがあった。

「よし、着替え終わったぞい。ん？ 皆どうした？」

「さあ？」

「……さあな？」

坂本が疑問符を浮かべ、俺は呆れたようにその面々を見ていた。

それから作戦遂行者の秀吉、作戦指揮者の坂本、随行の俺と吉井の4人は一路Cクラスへ。

ある程度まで近づいた処で、3人は身を隠す。

木下は姉になりすます事に、気を重くしつつCクラスへ。

「…心配なのだが？」

「秀吉なら大丈夫さ。何てったって演劇部のホープって呼ばれてるよ。それに秀吉は演技で妥協はしないはずだし。」

「へー」

そこまで言わせるほどのことに、期待を抑えきれない。

さて、どんな挑発をしてくれるのかなと、期待を込めて秀吉を見つめる。

深呼吸をし、表情を引き締めてCクラスの扉を開くと、まずは一言。

「静かになさい、この薄汚い豚ども！」

先制パンチが重過ぎる。

「え！？ 優子さんって、あんなふうなの？」

吉井が優等生とは遥かに異なるような喋り方に驚きを隠せない。

「な、なによアンタ！」

「話しかけないで！ ブタ臭いわ！！」

自分から話しかけておいて、それはないだろ。

「あんた、Aクラスの木下ね？ ちよつと点数良いからって、良い気になるんじゃないわよ！ 何の用よ！」

「私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの！ ましてブタ臭い貴女達なんて、豚小屋で十分だわ！」

「なっ！ 言っに事欠いて、私達にはFクラスがお似合いですって！ ！？」

Fクラス＝豚小屋なのだろうか？ ぎりぎり豚小屋よりはマシだと思っっているが……

「手が汚れてしまうから本当は嫌だけど、特別に今回は貴女達を相応しい教室に送ってあげようかと思うの。ちょうど試召戦争の準備もしている様だし、覚悟しておきなさい。近いうちに、私達が薄汚いブタの貴女達を始末してあげるから！」

そう言い残し、靴音を立てながら秀吉はCクラスの教室を出ていく。それと同時に、Cクラスから小山代表のヒステリックな声が響き渡る。

「これで良かったかのう？」

「ああ、最高だ。」

坂本が褒めたたえる。

「Fクラスなんて相手にしてられないわ！ Aクラス戦の準備を始めるわよ！！」

そして、見事に小山は引つ掛かり戦争の矛先をAクラスへと変えた。

「上手くいったな。流石は根本の彼女、ヒステリックな事で」

「ある意味お似合いかもね」

吉井と坂本はうんうんと、寸分違わず頷いた。

4人は一路、Fクラスへ。

「俺と坂本は本部待機だから……司令に姫路、補佐に秀吉がついてくれ。」

「うむ。承知した。」

そして、9時ちょうど。BクラスVS Fクラス戦再開

「ドアと壁をうまく使うんじゃ！ 戦線を拡大させるでないぞ！！」

今回も理系科目をメインに戦うので俺は坂本と共に本部待機になっている。今日は正念場であるため土屋が持っていたトランシーバーを姫路と秀吉に持たせ、本部との指示のタイムラグを無くそうとしている。

秀吉の指示がよく通っている、しかしながら疑問点があった。秀吉の声がよく通っている、それすなわち姫路が指示をしていないのではないか？それもあつてかどうも決め手に欠けた感じがある。

すると、いきなり吉井一人だけが本部にFクラス教室に入ってきた。

「雄二っ！有明君！」

「うん？どうした明久。脱走か？チヨキでシバくぞ」

「吉井、なんで一人で戻ってきた？」

「話があるんだ。」

「……とりあえず、聞こうか」

吉井は何時になく真剣で坂本もそれを察したのか真面目な表情で吉井の方を見る。吉井も真面目な表情で坂本に顔を向ける「根本君の着ている制服が欲しいんだ？」

「……お前に何があつたんだ？」

「なあ坂本。俺がコイツをチヨキでシバいていいか？」

今のは結構本気だ。何があつて根本の制服が欲しいのだろうか？プレミアなんてないぞ。

「ああ、いや、その。えーっと……」

「まあいいだろう。勝利の暁にはそれぐらいなんとかしてやろう。」

吉井のカミングアウトとも取れる発言に対し坂本は何か受け入れた。坂本は吉井がその手の趣味に目覚めても不思議ではないと思っているのだろうか？

「それと、姫路さんを今回の戦闘から外して欲しい」

いきなり、吉井がとんでもない事を言う。この戦争の作戦の根幹を覆すような内容だ。坂本はそれに構わず吉井に聞き返す。

「理由は？」

「理由は言えない。」

しかし吉井は理由を言わない。

「どうしても外さないとダメなのか？」

「うん。どうしても」

「おい、吉井。何で理由が言えないんだ。」

「えっーと…」

緊急事態にもほどがある。

「しかたない、坂本。俺が直接行って確認を取りたい。指示はそれからだろう。構わないか？」

「ああ、行ってきてくれ。」

吉井が絶望したような顔をしているが関係ない。姫路を理由なく外すなどあつてはならないからだ。そのくらい姫路の価値は高いものがある。

「吉井、案内しろ。」

「あ、うん。」

## Bクラス教室前

Bクラスの教室前にはここが正念場だと両クラス入り乱れての戦鬭になっているのだが、姫路の様子が明らかにおかしい。今にも泣きそうだ。そんなことをしてる間にも古典の場がピンチに立たされた。

「姫路！何をしている。さっさと古典に向かえ！」

しかしながら、姫路はおどおどとして、一向に行かない。

「ひ、め、じ！さっさと行け！」

もう一度呼んでも姫路は向かおうとしない。

「ああ、もう！俺が出る！試獣召喚！」

Subject: Classics

Class F

Name: Youtaro Ariake

Score: 195

VS

Class B

Name: Keiichi Hara

Score : 156

Class B

Name : Yuri Kitto

Score : 121

Bクラス2人は流石に骨が折れる。

「25点を消費して、ワイドショット」

「195 170」ワイドショットは貫通しないため一撃では倒しにくいものの対複数では消費点数<sup>コスト</sup>の割にいい仕事をする。

「156 44・121 30」

「更に15点を消費してマインボム」

「170 155」原と紀藤の召喚獣が前進して、俺の召喚獣に向かうも、原の召喚獣が地雷を踏んでしまい爆風で紀藤のを巻き込み戦死に追いやった。

「まだだ、Bクラス大野がFクラス有明『少々席を外します。』……ちっ。」

吉井の機転でMr.竹中が一時的に戦場から離れた。その隙に俺は、姫路の所に向かった。

「おい、姫路。何をやっているんだ。」

「……えっと……あの……」

「早く戦線に復帰してくれ！これじゃあ戦争に勝てない！」

「有明君、そのくらいにしてあげなよ。」

「黙れ吉井。俺は今姫路と話をしている。姫路、参謀総長からの命令だ。早く戦線に復帰しろ。」

「うう……」

姫路は涙ぐみ、なかなか戦線に復帰しない。

そんな姫路に俺は……

《一時的に吉井の視点になります。》

有明君が姫路さんに対して早く戦場に戻るように言っている。でも、姫路さんは行かない、いや行けないんだよ。根本のヤローに姫路さんのラブレターを取られているからだ。気付いてあげなよ、有明君！

あまりにうずうずしている姫路さんに痺れをきたしたのか有明君は姫路さんを……

思いつきり平手でほっぺをはたいた。

その瞬間、姫路さんは泣きながらどこかに行ってしまった、僕は有明君につかみ掛かっていた。

《吉井視点終り》

平手ではたいした後、姫路はどこかに行ってしまった。そして、俺は吉井につかみ掛かれていた。

「貴様、姫路さんに何をした！」

「何をしたって、戦場に立てるかを確認しただけだ。」

「はたかなくなっただけいいじゃないか！姫路さん、泣いていたぞ。」

「泣こうが喚こうが知ったこっちゃない。今使えるかどうかが大事なんだ。」

また、吉井がフェミニストっぷりを発揮している。

「邪魔だ。戦線に戻れ。それと坂本に連絡をする。姫路が本当に使えなくなったと」

「なにを！姫路さんはな姫路さんはな、ラブレターを根本のやつに取られてて、それで動けなかったんだぞ！」

…その程度の事かよ。

「ここは、戦場だ。こんなときに個人の都合など知ったことではない。」

吉井が人で無しを見るような目をしているが、構わず坂本に連絡を



する。

「坂本、姫路が本当に使えなくなった。」

「なんだと。」

「まあ、無い物ねだりをしてても仕方がない。作戦を変更したいがい  
いか？」

「ああ」

「今から1時間と採点時間の分何としても時間を稼いでくれ。ちょ  
つと本気でテストを行う。」

「何で今まで本気じゃなかった。」

坂本の声に怒気が含まれるが冷静にこう言った。

「Aクラス戦用の秘策にするつもりだったが、本当になりふり構っ  
てられなくなった。日本史の先生を用意してくれ。」

「ああ、わかった。それと吉井に代わってくれ。」

俺はトランシーバーを吉井に渡し、速やかに本陣に戻った。吉井も  
なぜか、トランシーバーを聞き終えると教室の方へとむかったが、  
俺は自分のやるべき事をするために気にしなかった。

## Fクラス教室

代表さえ出払った教室で一人回復試験を受ける。いつもなら適当  
なところ まあ400点ちょい上あたり で切り上げるのだが今回  
はそうもいつてられない。でかい魔法を使うためにはより沢山の得  
点が必要になるからだ。だから、今回は最後の1秒まで書き続ける。  
すまないが、耐えてくれよ！

## Bクラス教室前

### 《坂本視点》

現在の時刻は午後2時55分。作戦A開始まであと3分。作戦Y開  
始まであと5分。Dクラスに指示を出した後、俺達はBクラス教室  
前に集まり根本と対峙していた。

「お前らいい加減諦めろよな。昨日から教室の出入り口に集まりや

がつて暑苦しいことこの上ないっての」

ドンッドンッ

根本が俺達を挑発するように嘲笑う。

「どうした？ 軟弱なBクラス代表サマと腰巾着さんはそろそろギブアップか？」

俺は挑発に乗ることなく言い返す。姫路が戦線から外れた為、また、有明の策を成功させるためにも本隊も総動員することになったのだ。

「はア？ ギブアップするのはそっちだろ？」

「無用な心配だな」

「そうか？ 頼みの綱の姫路も調子が悪そうだぜ？」

「お前らじゃ役不足だからな。今日のところは休んでもらうことにした。」

ドンッドンッ

「さっきからドンドンと、壁がうるせえな。何かやっているのか？」

「さあな。人望のないお前に対しての嫌がらせじゃないのか？」

「けっ。言ってるどうせもうすぐ決着だ。お前ら、一気に押し出せ！」

その瞬間だった。俺の携帯に帝国のマーチが流れた。作戦A決行だ！

「……態勢を立て直す！ 一旦下がるぞ！」

指示に従い本隊が一斉に後退する。

「どうした、散々ふかしておきながら逃げるのか！」

Bクラスは尚も前進する。 なかった！

「Fクラス参謀総長有明洋太郎、今前進している奴ら全員に日本史勝負を仕掛ける。試験召喚！」

Subject: Japanese History  
Class F

Name: Youtaro Ariake  
Score: 561

VS

Class B  
Name: Shinji Ooki  
Score: 175

Class B  
Name: Mariko Nakamura  
Score: 182

Class B  
Name: Yuka Sanada  
Score: 155

Class B  
Name: Saburo Yanagisawa  
Score: 166

Class B  
Name: Shingo Kurotaki  
Score: 174

Class B  
Name: Chinami Nishikino  
Score: 149

おいおい、561点なんて、翔子の点数でもお目にかかれな  
いぜ。なんつー隠し玉を持ちやがってなんだよ。でも、驚くのはまだ早  
かった。

「200点を消費して、メテオ。」

『561 361』有明の召喚獣の杖がピカピカ光ったら、いきな  
り隕石が山のように落っこちてきた。

これじゃあ明久はともかく普通の奴らなら避け切れずにぺしゃんこ  
だろう。案の定、何も抵抗出来ずにBクラスの召喚獣が死んでゆく。

「まだだ！加西・鈴木・岡田。有明を止める！」

根本のヤローが近衛部隊の一部を割いて有明を倒すようにほざいて

るが無駄な事だろう。

Subject: Japanese History

Class F

Name: Youtaro Ariake

Score: 361

VS

Class B

Name: Shinnichi Kasai

Score: 192

Class B

Name: Miwako Suzuki

Score: 177

Class B

Name: Atsuya Okada

Score: 163

このまま有明でごり押しでも良いんだが、ちょっと明久に花を持たせてやろう。

「有明、時間稼ぎに専念してくれ！」

「了解、40点を消費して武器化：ウエボナイスガドリング」

『361 321』今度は木の杖が変化して鉄砲になった。有明は指示を守り細かく点数を削りながら、絶対に自分の召喚獣に近寄せないようしていた。

時刻は3時ちょうど、Dクラスとの壁が破れ島田と明久が根本に攻め掛かるが近衛部隊の残りに止められた。だがこれで十分。根本には守るやつがない。そして……

「……Fクラス、土屋康太」

「キ、キサマ」

ムツツリー二と保健体育の教師、大島先生だ。保健体育の教師は常軌を逸した行動力をもつ。上の階から窓の中へと入るなんて保健体育の教師しか出来ない。

「…… Bクラス根本恭二に保健体育を申し込む」

「ムツツリーニイーツ!!」

「…… 試獣召喚」

Subject: P.E.

Class F

Name: Kouta Tsuchiya

Score: 441

VS

Class B

Name: Kyouji Nemoto

Score: 204

ムツツリー二の小太刀が根本の召喚獣を一刀両断して、俺達の勝利が決まった。

## 第7問（後書き）

始めにお詫びをば。

姫路さんをひっぱりたいちゃってすいません。しかし、どうしてもやりたかったのです。

戦争中の兵隊、ましてや主力が私事で任務を放棄するなどあつてはならないことかと。

洋太郎はそれこそ、男だから・女だからといった思想は持ち合わせていません。

出来るやつが出来ることをやる。姫路さんは出来るのにやらないから洋太郎は怒ったのを理解してください。

帝国のマーチ やる気のない（残念な）ダースベイダーのテーマのこと。栗コーダーカルテットの有名な曲です。

感想待ってます。

## 第8問（前書き）

バカテスト 保健体育

問題：（ ）の中を満たしなさい。

『女性（ ）を迎える事で第二次成長期になり、特有の体付きになり始める』

姫路瑞希の答え

「初潮」

教師のコメント

正解です。

有明洋太郎の答え

「初経」

教師のコメント

これも正解です。

吉井明久の答え

「明日」

教師のコメント

随分と急な話ですね。

土屋康太の答え

「初潮と呼ばれる生まれて初めての生理。医学用語では、生理の事を月経、初潮の事を初経という。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が43kgに達する頃に初潮を見るものが多い為、その訪れる年齢には個人差がある。日本では平均12歳。また、体重の他にも初潮年齢は人種、気候、社会的環境栄養状態などに影響される」  
教師のコメント

詳しくございます。



## 第8問

「明久、随分と思い切った行動にでたのう」

戦後、Bクラスにやってきた秀吉は吉井にそんな事を言った。

「うう……。痛いよう、痛いよう……」

「当たり前だろ、吉井。素手でコンクリートの壁壊したんだからな、痛みが100%跳ね返るわけじゃないとは言え、そりゃ痛いだろう。」

「なんともお主らしい作戦じゃったな」

「で、でしょ？もつと褒めてもいいと思うよ？」

「後のことを何も考えず、自分の立場を追い詰める、男気溢れる素晴らしい作戦じゃな」

「……遠まわしに馬鹿って言ってるじゃない？」

「いや、かなりわかりやすく馬鹿って言ってると思うぞ」

「あんまりだっ！」

「有明よ。あまり明久を泣かせるようなことを言うてない」

「先に言っただのはあんただからな。オブラートに包みや良いってものじゃないだろ。まあ、とりあえずこれで吉井の放課後は職員室行き決定だな。」

「ご愁傷様じゃのう……」

「ま、それが明久の強みだからな」

雄二が明久の肩を叩く。それについては俺も同意だ。

「坂本。それにしても、よくこんな隠し玉用意していたな。俺にも内緒で。」

「まあな。さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といくか。な、負け組代表？」

「……」

床に座り込み黙り込んでいる根本。

「本来なら設備を明け渡してもらい、お前らには素敵な卓袱台をプ

レゼントするところだが、特別に免除してやらんでもない」

そんな坂本の発言に、周囲の連中が騒ぎ出す。

「落ち着け、お前ら。最初に坂本が言ってただろう。俺達の目標はAクラスだ。Bクラスを手に入れる必要はない。」

俺の言葉に坂本が続く。

「ここはあくまで通過地点だ。だから、Bクラスが条件を呑めば解放してやろうかと思う。」

その言葉でFクラスの連中は納得したような表情になる。Dクラス戦のときにも言った事だし、坂本の性格を理解してきたのだろう。

「……条件は何だ。」

根本が力なく問う。

「条件？それはお前だよ、負け組代表さん。」

「俺、だと？」

根本が疑問に思う。それは当然だ。俺が根本でもそう思う。

「ああ。お前には散々好き勝手やってもらったし、正直去年から目障りだったんだよな。」

坂本は根本の痛いところをつくが、周りの人間は誰もフォローしない。本人もわかってるみたいだ。

「そこで、お前らBクラスに特別チャンスだ。Aクラスに言って、試召戦争の準備ができていると宣言して来い。そうすれば今回は設備については見逃してやつてもいい。ただし、宣戦布告するな。すると戦争は避けられにからな。あくまでも戦争の意思と準備があるだけで伝えるんだ」

「……それだけでいいのか？」

疑うような根本の視線。当初の計画ではそれだけのはずだったが。

「ああ。Bクラス代表がコレを着ていったとおりにしたら見逃そう。そう言つて坂本が取り出したのは、朝に秀吉が来ていた制服。これは吉井が制服を手に入れるための手段だ。」

「ば、馬鹿なことを言つな！この俺がそんなふざけたことを……！」  
根本が慌てふためく。

「Bクラス生徒全員で必ず実行させよう！」

「任せて、必ずやらせるから！」

「それだけで教室を守れるなら、やらない手ないな！」

…… Bクラス生徒達の思わぬ裏切り。いや、案外こうなるんじゃないかと思つていた。

「んじゃ、決定だな」

「くっ！よ、寄るな！変態ぐふうっ！」

「とりあえず黙らせました」

「お、おう。ありがとう」

一瞬で代表を見限つて腹部に拳を打ち込んだBクラスの男子。流石の坂本も驚いてるようだ。

「では、着付けに移るとするか。明久、任せたぞ」

「了解」

明久が倒れている根本に近づき、制服を脱がせる。その表情は当然、気持ち良さそうな顔ではない。

「う、うう……」

うめき声をあげる根本。

「ていつ！」

「がふっ！」

そこに吉井の追加攻撃。

その後男子の制服を剥ぎ、女子の制服をあてがうが、やり方がわからないようだ。分かる秀吉がおかしいと思う。

「私がやってあげるよ。」

Bクラスの女子がそう提案する。

「そう？悪いね。それじゃ、折角だし可愛くしてあげて。」

「それは無理。土台が腐ってるから。」

「じゃ、よろしく」

吉井はそう言い、根本の制服を持ってその場を離れた。姫路のラブレターとやらを回収するのだろ。それは置いといて根本の着替えを始める。

まあ、そんなに誰得な根本の着替えも終わり…

「いいからキリキリ歩け！」

「さ、坂本め！よくも俺にこんなことをー！」

「無駄口を叩くな！これから撮影会もあるから時間がないんだぞ！」  
「き、聞いてないぞ！」

いつの間にか撮影会までスケジュールに入っていた。これからの出来事は根本には一生忘れられないトラウマになるに違いない。

Bクラス戦が終結してから二日後、俺達は点数補給のテストを終えた日の朝、全てのテストの得点を回復しきり、俺もBクラス戦からの隠し玉、歴史教科も本気の点数に上げた。残すAクラス戦についての説明会を受けていた。

「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われているにも関わらずここまで来れたのは、他でもない皆の協力があったることだ。感謝している。」

壇上の坂本が珍しく素直に礼を言う。

「ゆ、雄二、どうしたのさ。らしくないよ？」

「一年の時からダチの吉井が言うって事は本当に珍しいみたいだな。本当にどうしたんだ？」

「ああ。自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」  
その様子から察するにこれが本音で間違いないようだ。

「ここまで来た以上、絶対Aクラスにも勝ちたい。勝って、生き残るには勉強すればいいってもんじゃないという現実を、教師どもに突きつけるんだ！」

『おおーっ！！』

坂本の関の声に皆が答える。かく言う俺も叫んだ。

「皆ありがとう。そして残るAクラス戦だが、これは一騎討ちで決着をつけたいと考えている」

俺を始めとした先日の昼食時にいたメンバーは既に聞いた話だったので驚かなかったがそれ以外の連中はかなり驚いており、教室中にざわめきが広がった。

「そして、やるのは当然俺と翔子だ。」

Aクラス代表の霧島翔子とFクラス代表の坂本雄二。クラス間の競争を代理で行うのだから、代表同士の一騎打ちは当然だ。しかし、坂本がどうやって勝つのが問題だ。相手は学園主席の霧島翔子だ。俺は奴と一年の時同じクラスだったが、その学力は俺や姫路でも、明らかな差をつけられている。俺がそんな事を考えていると、

「馬鹿の雄二が勝てるわけがなああっ!？」

「うおっ!？」

余計な事を口にした吉井の頬を、カッターがかすめる。坂本は友達を本気で殺すつもりなのか？

「次は耳だ。」

どうやら、吉井は友達と思われてないらしい。

「残念ながら、事実だろ。ちゃんと説明しろ。」

「そう、せかすな。確かに翔子は強い。まともにやりあえば勝ち目はないかもしれない。」

さっきカッターを投げた男はあっさりと事実を認めた。

「だが、それはDクラス戦もBクラス戦も同じだったろう？まともにやりあえば俺達に勝ち目はなかった。」

そんな俺達は、二連勝。

「俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を皆に見せてやる」

「おおおーっ!！」

全員の意思を確認するまでもなく坂本を信じているようだった。

「さて、具体的なやり方だが……一騎打ちはフィールドを限定する

つもりだ。」

「フィールド？何の教科でやるつもりじゃ？」

「日本史だ。」

「霧島は日本史もかなりできるし、坂本が得意って訳でもないよな？一体日本史でどうする気だ？」

「内容を限定する。レベルは小学生程度、方式は百点満点の上限あり、召喚獣勝負ではなく純粋な点数勝負だ。」

「なるほど、その条件だと、満点が前提になって、ミスした方が負けになるから注意力勝負になるな。確かに召喚獣勝負よりは勝ち目はあるが……」

「でも、同点だったら、きっと延長戦だよ？そうしたら問題のレベルも上げられちゃうだろうし、ブランクのある雄二には厳しくない？」

「確かに明久の言うとおりじゃ」

俺が言おうとした事を吉井が先に言い、木下がそれを肯定する。

「おいおい、あまり俺を舐めるなよ？いくらなんでも、そこまで運に頼り切ったやり方を作戦などというものか。」

当たり前だ。そんなのは作戦ではなくギャンブルだ。

「？？それなら、霧島さんの集中力を乱す方法を知ってるのか？」

「いいや。アイツなら集中してなくても、小学生レベルのテストなら何の問題もないだろう」

それもそうだ。

「雄二。あまりもつたいぶるでない。そろそろネタを明かしてもいいじゃろう？」

クラスの連中も木下の言葉に頷く。俺も色々考えて見るが、坂本が何を考えているのか見当がつかない。

「俺がこのやり方を選った理由は一つ。ある問題が出れば、アイツは必ず間違えると知っているからだ。」

ある問題？

「その問題は『大化の改新』」

中大兄皇子が645年に発布した政治的改革だ。無事故の改新なり、蘇我氏は虫殺しなりで覚える。

「大化の改新？誰が何をしたのか説明しろ、とか？そんなの小学生レベルの問題で出てくるかな？」

吉井が坂本に問う。

「そんな掘り下げた問題じゃない。もっと単純な問いだ。」

「単純というところ何年に起きた、とかかのう？」

「おっビンゴだ秀吉。お前の言うとおり、その年号を問う問題が出たら、俺達の勝ちだ。」

そんな基礎的な問題を、霧島が間違えるのか？そもそも何で坂本はそんな事を知っている？というか、さっきから霧島を親しい奴みたいな呼び方をしている。別にそれは問題ではないが。

「大化の改新が起きたのは、645年。こんな簡単な問題は明久ですら間違えない。」

気になったので吉井の方を向くと何故か顔を逸らす。どうやら小学生レベルのこれもわからなかったらしい。流石だ。

「だが、翔子は間違える。これは確実だ。そうしたら俺達の勝ち。晴れてこの教室ともおさらばだ」

「

「あの、坂本君」

「ん？なんだ姫路」

「霧島さんとはその……仲が良いんですか」

俺も思っていたこと（多分みんなが思っていたこと）を姫路が聞く。

「ああ。アイツとは幼馴染だ」

「総員、狙ええ！」

吉井が坂本に牙を向いた！？日頃の恨みか？

「なっ！？なぜ明久の号令で皆が急に上履きを構える！？」

「黙れ男の敵！Aクラスの前に貴様を殺す！」

「俺が一体何をしたと！？」

坂本の言葉に耳を傾ける事無く吉井は坂本に殺意を向ける。

「遺言はそれだけか？……待つんだ須川君。靴下はまだ早い。それは押さえつけた後で口に押し込むんだ」

「了解です隊長」

なかなかえげつない。ていうか、なんつー嫌らしい統率力だ。

「あの、吉井君」

「ん？姫路さん。何？」

「吉井君が霧島さんが好みなんですか？」

「そりゃ、まあ、美人だし」

「……」

ん？島田はともかく姫路からも殺気が漂うぞ。気のせいか……って姫路はこんなキャラじゃないはずだよな？

「え？なんで姫路さんは僕に向かって攻撃態勢を取るの！？それと美波、どうして君は僕に向かって教卓なんて危険な物を投げようとしているの！？」

これはかなりヤバイ。このままではAクラスと戦う前にFクラス内で内戦が勃発し同士討ちをおっぱじめる事になる。（死ぬのは主に吉井と坂本だが）

吉井はともかく坂本が死んだら戦争どころじゃない。

「おいおい。お前らしい加減に落ち着けて」

「有明の言つとおりじゃ、皆一旦座るのじゃ」

冷静な態度で俺がクラス全員に注意すると、木下も他の連中を宥めてくれる。

「む。有明君と秀吉は雄二が憎くないの？」

「別に今考える事じゃない。まずは戦争をどうするかだ。」

「それに冷静になって考えて見るがよい。相手はあの霧島じゃぞ？男である雄二に興味があるとは思えんじやろうが」

霧島は告白を全て反古にしているため同性愛者の疑いがまことしやかに流れている。そうなると、興味があるとすれば……全員の視線が姫路に集まる。

「な、なんですか？もしかして私、何かしました？」



姫路は特に何もしてない。ただ、霧島は去年から男には興味が無い同性愛者で今は姫路を狙っているという噂が流れているだけだ。まあ、所詮はただの噂に過ぎないが。

「とにかく、俺と翔子は幼馴染で、小さな頃に間違えて嘘を教えたんだ。アイツは一度覚えた事は忘れないほど頭が良い、でも今回はそれが仇になる。俺はそれを利用してアイツに勝つ。そうしたら俺達の机は―」

『システムデスクだ！』

おもしろいなあ、代表の考えは！

## 第8問（後書き）

感想を待っています！

## 第9問（前書き）

バカテスト 生物

問題：以下の問いに答えなさい

『人が生きていく上で必要となる5大栄養素をすべて書きなさい。』

姫路瑞希の答え

「1：脂質 2：炭水化物 3：たんぱく質 4：ビタミン 5：ミネラル」  
教師のコメント

流石は姫路さん。優秀ですね。

有明洋太郎の答え

「1：炭水化物 2：タンパク質 3：脂質 4：ビタミン 5：無機質」  
教師のコメント

正解です。ミネラルのことを無機質あるいは無機塩類とも呼びます。

吉井明久の答え

「1：砂糖 2：塩 3：水道水 4：雨水 5：湧水」  
教師のコメント

それで生きていけるのは君だけです。

土屋康太の答え

「初潮年齢が十歳未満の時は早発月経という。また、十五歳になっても初潮がない時を遅発月経、更に十八歳になっても所長がない時を原発性無月経といい……」

教師のコメント

保健体育のテストは一時間前に終わりました。

## 第9問

全く面白過ぎる。

「ハハハハハハ……おかしい、おかしいよ。」

臍で茶が沸くくらいにね。

「何がおかしいんだい？」

吉井が俺の爆笑の理由を尋ねる。

「おまえら、ちょっとは考えろや。この作戦にはよー、落とし穴がいや落とし穴だらけだってことだよ。」

『えっ…まじかよ？』

クラスメートが動揺している。

「んだと……言ってみろよ。」

坂本の口調が変わった。

「始めに聞いておくが他に霧島に間違えた事を教えてないよな。」

「ああ。それがどうした。」

「んじゃあ……真面目に答えろよ。本番の模擬演習だ。江戸の三大改革の元号は？」

「享保・天明・天保」

「坂本君、それは江戸の三大飢饉の元号ですよ。三大改革は天明じゃなくて寛政です。」

思ったとおりに坂本は間違えた。当然姫路は正解。

「じゃあ、『この世をば』から始まる望月の歌の作者は？」

「菅原道真」

「藤原道長だ。これでもう2問間違えた。お前の負けだよ。」

「しかし、洋太郎よ。これは出来過ぎではないだろうか？洋太郎の問題に雄二がたまたま間違えただけかもしれないし、この問題はないかもしれないぞ。」

秀吉がなおも突っ掛かる。

「出るかもしれないぞ。そもそも霧島に坂本は1つだけしか間違え

た物を教えていない。つまり坂本は勝つためには全問正解するよりほかはない。でも坂本は今の2問を間違えた。それも俺が適当に考えたやつをだ。そんなやつにFクラスの明暗を任せられるか？」

「う、うむ。」

秀吉がどもる。

「なあ、姫路。小学生レベルの日本史とは言え、いつでもどこでもどんな状況でも『満点』をとれるか？」

「えへへ……ちよつと、厳しいです。いつでももつてなると……」

「学年次席で押しも押されぬ才媛、姫路瑞希でさえこう言ってる。

多分俺でもキツイ。ましてやかかつての『神童』とはいえ『Fクラス』の坂本じゃあ今からやっても無理だ。」

坂本はぐうの音も出ずに苦々しい顔をしている。

「それじゃあ、どうすればいいのよ?! まさかウチらにAクラスと試召戦争をやれっていうの?」

島田の疑問にみんなが頷く。

「それはない。それじゃあホントに勝つ可能性が0だ。1対1じゃなくて団体戦にすりゃいいんだ。」

ここで、俺のプランを発表する。

「しかし、これには宣戦布告時の交渉力がまず第一にカギになる。今まで通り吉井に行かせるなんて愚行は出来ない。」

吉井がぶーぶー言っているが気にせずに続ける。

「その後は、何対何かによって代わってくるが、絶対に7対7以上にはするな。そのぐらいなら坂本でもわかるよな。」

「ああ、お前はこっちの勝ち星を姫路・ムツリーニの保健体育・お前の歴史の3つで考えている。7対7以上だとどうしても勝つために4勝しなきゃならない。だろ?」

「That's right. それと、万が一点になったときは、サドンデスでは無く、その時にあらためて交渉して事にくれ?」

「それがなんなのよ？」

「まあ、保険だと思ってくれ。それと、俺は宣戦布告にはいかないぞ。姫路瑞希はFクラスのエースで普通ならAクラスにいないとおかしいレベルだから、Aのやつもわかるはずだが、俺は上手く行けばばれないかもしれない。それと、万が一の保険を作っておきたい。」

「わかった。今回は全面的にお前の策に乗っかる。有明、勝てるよな？」

「余程のイレギュラーが無ければな。」

「まあ、そうだな。おまえら！今度こそ大丈夫だ。俺達の机は…」

『システムデスクだ！』… よろしい。じゃあ、行ってくる姫路に明久、ムツツリー二に秀吉と島田は一緒に来てくれ。」  
さて、もう一つ仕込んでおこうかな。

《ここからは坂本視点です。》

「一騎討ち？」

「ああFクラスは試召戦争として、Aクラスに一騎討ちを申し込む。」

恒例の宣戦布告だ。今回は代表の俺を筆頭に、明久、島田、秀吉、土屋、それに姫路と首脳陣を揃えて（参謀総長欠席中）Aクラスに来ていた。

「一体何が狙いなの？」

交渉のテーブルについているのは木下の双子の姉の木下優子だ。

「もちろん俺達Fクラスの勝利が狙いだ。」

警戒するのも無理はない。下位クラスの俺達が一騎討ちで学園トップの霧島に挑む事自体、不自然なのだし何か裏があると思っているだろう。当然だ。

「Fクラスとの面倒な試召戦争を手軽に終わらせる事が出来るのはありがたいけど、だからと言ってわざわざリスクを冒す必要もな

いわ。」

「賢明だな。」

ここまでは予想通り。ここからが本番だ。

「ところで、Cクラスとの試召戦争はどうだった？」

「時間は取られたけど、それだけよ？何の問題もなし。」

秀吉の挑発に乗り、昨日Aクラスを攻めたCクラス。決着は半日でつき、Cクラスの設備はDクラスと同じになった。

「Bクラスとやりあう気はあるか？」

「Bクラスって……昨日来てたあの……」

「ああ。アレが代表がやってるクラスだ。幸い宣戦布告はまだされていないようだ、さてさて。どうなることやら……」

「でも、BクラスはFクラスと戦争をしたから、3ヶ月の準備期間を取らない限り試召戦争はできないはずよね？」

これは試召戦争のルールの1つ。戦争に負けたクラスは3ヶ月の間、自分から宣戦布告できない。これは負けたクラスがすぐに再戦を申し込んで、戦争が泥沼化しない為の取り決めだ。

「知ってるだろ？実情はどうあれ、対外的にはあの戦争は『和平交渉にて終結』という形になってる。規約にはなんの問題もない。…

…そしてDクラスもだ。」

「……それは脅迫かしら？」

「人間きが悪い。ただのお願いだよ」

「今の雄二ってなんか根本君みたいだね……」

「まあまあ、明久よ。今は静かにしておれ。」

うるせえ、黙ってみている明久<sup>バカ</sup>。

「まあいいわ。何を企んでるか知らないけど、代表がFクラスのバカに負けるなんてありえないし、その提案受けてあげるわ。」

「え？本当？」

会話に参加してない明久<sup>バカ</sup>が声をあげる。

「あんな格好した代表のいるクラスと戦争なんて嫌なのよ。」

昨日。根本は女子の制服を着て話をしに来た。そのおかげで提案があっさり通るとは。イレギュラーな収穫だ。

「でも、こちらから提案。代表同士の一騎打ちじゃなくて、そうね、お互い5人ずつ選んで、一騎打ち5回で先に3勝した方の勝ち、この提案なら受けていいわ。」

やはり警戒心は緩んでいない。

「なるほど。姫路が出てくる可能性を警戒してるんだな？」

「多分大丈夫だと思うけど、代表が調子悪くて姫路さん、それと『有明君』が絶好調だったら、問題次第では万が一があるかもしれないからね。」

ん、なんで有明の事を知ってやがる？そう思ったが、俺はポーカーフェイスを貫いたが、

「えっ？何で有明君のこと…」

また明久（？）がやってくれた。コノヤロー、やはりバカは連れていくんじゃないかった。

「後ろの子の疑問に答えましょうか。実はね、近所の女の子からの情報よ。」

「近所の」

「……女の子」

「「（……）有明洋太郎、許すまじ」」

いかん、明久とムツツリーニがFFF団化している。人の恋愛には死の鉄槌を与えるのだが、今そうなってもらっちゃ困る！

幸い、秀吉と島田が抑えてくれてるが、時間の問題だ。少し急ごうか。

「安心してくれ。うちからは俺が出る」

「無理ね。その言葉を鵜呑みにはできないわ、これは競争じゃなくて戦争なのよ」

「そうか。それなら、その条件を呑んでも良い。」

よし、まずは第一段階突破だ。5対5なら勝ち目がある。

「あら、話がわかるじゃない。」



「けど、勝負する内容はこちらで決めさせて貰う。そのくらいのハ  
ンデはあってもいいはずだ。」ここが大事なところだ。科目選択  
権は俺達にとつて重要だ。ムツツリー二は言うに及ばず、有明の得  
点も日本史・世界史以外は良くてBクラス、ひどいものはFクラス  
相当のものだつてある。一騎討ちの上に科目も選ばせるなんて、言  
つてる俺が言うのも難だが、話は流石に虫が良すぎる。

「……………」  
黙り込んで悩む木下姉。クラスを代表して交渉してる立場ゆえか、  
安易な判断が出来ないのは当然だ。

「……………受けてもいい。」  
「うわっ！」

例のバカが情けない声を出す。

「……………雄二の提案を受けてもいい。」

いきなり現れた静かな声をだした人物、翔子だ。

「代表……………いいの？」

「……………その代わり、条件がある。」

「条件？」

「……………うん。」

霧島は頷いて俺を見た。その後、姫路をゆっくりと観察した。再度  
俺に顔を向けて言い放つ。

「……………負けたほうは何でも一つ言う事を聞く。」

「……………（カチャカチャ）」

「ムツツリー二、まだ撮影の準備は早いよ！というか、負ける気満  
々じゃないか！まさかこれも計算の内なんじゃ、流石は学年代表だ。  
恐ろしい」

こいつらを連れて来た俺がバカだった。反省しよう。

「なら、こうしましょう。勝負内容はFクラスが3つ、Aクラスが  
2つ決める。これでどう？」

木下姉の妥協案が得られた。正直ぎりぎりだが、姫路にならAクラ

ス相手でも引けをとらないし、嬉しいことに全科目で満遍なく高得点をとるタイプだ。

となりでは明久と姫路が小声で何か話してるがあまりたいした内容ではなさそうなので気にしない。

「交渉成立だな。」

「ゆ、雄二！何を勝手に！まだ姫路さんが了承してないじゃないか。」

「明久。何を想像してるか知らんが少し落ち着け。」

俺は明久を宥める。

「心配すんな。姫路に迷惑はかけない。」

翔子の狙いは分かっている。

「……勝負はいつ？」

「そうだな。十時からでいいか？」

「………わかった」

「よし。交渉成立だ。一旦教室に戻るぞ。」

交渉を終了し、Aクラスをあとにする。あとは十時まで待つだけだ。俺はやるべき事を全てやりのけた。

有明、頼むぞ。

## 第9問（後書き）

感想を待っています。  
じゃんじゃん送ってください。

## 第10問（前書き）

バカテスト 日本史

問題：太平洋戦争初期に大活躍をした日本の代表的な戦闘機をこれが出来た年が皇紀2600年であることから、何と言つてでしょう？

有明洋太郎の答え

「零式艦上戦闘機」

教師のコメント

正解です。皇紀2600年の史実も知っているのは流石ですね。

島田美波の答え

「メツサーシュミット」

教師のコメント

それは、第二次世界大戦期に活躍したドイツの戦闘機です。日本のものもしっかり覚えましょう。

吉井明久の答え

ゼロの使い魔

教師のコメント

いろいろと関係ないはずなのにゼロだけ合っているのが腹立たしいです。

## 第10問

「では、両者共準備は良いですか？」

立会人を務めるのはAクラスの担任で学年主任のM S・高橋、通称『高橋女史』

「ああ」

「……………問題ない」

一騎討ちの会場はAクラス。Fクラスが<sup>バカ</sup>Aクラスに<sup>エリート</sup>挑戦するのにFクラスでは見映えがしないということだ。俺達にとつちやアウェーだ。まあ、これにはもう一つ理由が有るのだが…

「それでは一人目の方、どうぞ」

「さつさと片付けるわよ。早くでてきなさい。」

Aクラス先鋒は木下優子。どうもFクラスを見下している節がある。まあ、この学園のスタンダードな態度なのだが。それに対してFクラスは……

「わしが行くのじゃ。」

「ああ、行つてこい秀吉。」

…秀吉だと？どういつつもりだと問い質そうとしたが、坂本がまあ見ていと言わんばかりの素振りなので佇んでいるので何かあるのだろう。あるいは姉弟だから何か弱点とかがわかるからか。

「秀吉、ちよつといいかしら？」

「なんじゃ、姉上？」

「あなたCクラスの小山さんって知ってる？」

「はて、誰じゃそれは？」

Cクラスの小山といえば、秀吉の変装による二セの挑発にまんまと騙され、Aクラスへと宣戦布告見事に敗北。今CクラスはDクラス相当の設備になっている。

「ふーん、ちよつと来てくれるかしら？」

「何じゃ、姉上。なぜワシの腕を掴むのじゃ？」

そついうと有無を言わず廊下へと連れ出した。

「あんたCクラスでいったい何を言ってくれたのかしら？どうして私がCクラスの人たちを豚呼ばわりしたことになっているのかしら？」

「はっはっは、それはじゃな姉上の本性をワシなりに推測して……ちが、姉上！そっちの関節はそっちには曲がらな……ギヤアアアア……」

聞いてはいけないような音声が聞こえている。ってまずくないか？

ガラガラガラ

扉を開けて木下さんが戻ってくる。

にこやかに笑いながらハンカチで返り血を拭う木下姉。

「秀吉は急用ができたから帰るってさ。代わりの人出してくれる？」

「い、いや………。うちの不戦敗で良「ちよつと待つてくれ。Ms・高橋、質問があります。今の木下優子の行為は試験召喚戦争のルール『召喚者自身の戦闘参加』に当たるのではないのでしょうか？」

坂本は不戦敗を認めようとしていたが、ここは俺が遮った。上手く揺さぶりをかけられれば有利になる。

「なによ、何か証拠でもあるっていうん……少し黙ってくれないか？。今俺はMs・高橋に質問しているんだ。」……ちっ」

木下姉が隠れて舌打ちをしていた。おおかた皆が想像している、優等生像はメツキなのだろう。

「しかし、先程は試験召喚獣を出していませんでした。」

「なら、質問を変えましょう。俺は勝つためには何でもやるつもりです。もしこの場で我々FクラスがAクラス全50人のうち48人をぶちのめしたら、Aクラスは2人しか代表を出せなくなり、自動的にFクラスの勝ちになるのでしょうか？先程の木下優子さんの行為は、被害者が1人とはいえ、いま私が言ったことと同じではない

でしょうか？」

「ちよつと、有明君何言……フゴフゴ」

吉井がまた、何か言おうとしていたが坂本が黙らせていた。ありがたい。

「それは……」

よし、M s・高橋がどもつてきた。ここでもう一押しだな。

「それならこの一回戦はFクラスの不戦敗で結構です。こちらとしても第二の木下秀吉を作りたくありません。今は1人でも人材は惜しいですから。しかし、今後の再発を防ぐため、木下優子さんに私が考えたペナルティを課して頂きたいのですが、いかがでしょうか？」

……さあ、どうだ？

「…わかりました。認めましょう。」

……よし、勝った！

「それでは、本来なら補修するはずの木下秀吉君の補修を免除し、木下優子さんの得点を全教科0点にしてください。秀吉の補修免除はあくまでもおまけです。木下さんに10教科分無駄な回復を強いられますので…いかがでしょうか？」

「承認します。」

M s・高橋が認め、Aクラスの前のスクリーンにはこう表示された。

『Aクラス対Fクラス

木下優子対木下秀吉

木下優子の不戦勝。

特例措置により、木下優子の得点を剥奪。

Aクラス

Fクラス × 『

木下姉が恨めしげに俺の方を向いていたが、自業自得だろう。余計な事をしなければ普通に勝てたはずなのに……。

「では、二人目の方どうぞ。」

さっきのこの動揺もあつたらうに、平然とMs・高橋は進行を行う。

「有明、頼むぞ。」

今度はこちらが科目選択権を持っている試合（1・4がAクラス、2・3・5がFクラスが科目選択権を保有している。）だ。そのため俺が土屋を出す場面だが、坂本は俺を先にだすようだ。異論はないため素直に従う。一方Aクラスは…

「私が行きま…すみません。佐藤さん私に行かせてください。…

いいですよ、翔子さん。」……うん、さくらに任せる。有明の力を一番分かってるのがさくら、ごめんなさい美穂。」…いえ、わかりました。2回戦は天王洲さんに任せます。」

さくらが出て来るようだ。

「洋太郎さん、お久しぶりです。」

「まあ、しばらくぶりでも言っておこうか？」

相手はさくらだけあつて、ちよつとの隙でも付け込まれる。堅物の多いAクラスの中では珍しく臨機応変な対応ができるだろう。

「洋太郎君、あの……これが終わったら、大事な話があるので、残つていてくれますか？あ、戦争の事には関係ありませんので。」

「ああ、構わないよ。」

「ねえねえ、有明君。あの子とはどういう関係なの？」

吉井がまた尋ねてきた。おそらく自分で考える事をしないのだろう。

「ああ、あいつの家は近所で俺ん「総員、有明を狙えー！」…うおつ、危ねえ。何しやがるんだ！」

いきなり、クラスメート 3人（坂本・姫路・島田）が妙な覆面を被り、俺にカッターを投げ付けてきた。なんとか回避したが……これが噂に聞くFFF団か？

「おまえら、何やってるんだ！」

「黙れ、雄二！女の子と仲良くおしゃべりしてるなんて……戦争の前にあいつを、あいつを……」

坂本が止めようとしているが、吉井を始めとするFクラスの連中は



止まらないようだ。

スツ…（俺がコンパスを投げる音）

シャツ（コンパスが吉井の皮膚を掠める音）

「吉井、次はここ（頸動脈を指差す）だぞ、少し黙ってくれ。」

「すいませんでしたっ！」

流石に命には代えられないだろう。

「そろそろ始めます。科目を選んでください。」

Ms・高橋が何事も無かったかのように話す。大丈夫なのか？この教師は？

「ええと…日本史で「物理をお願いします。」というつもりだ、さくら。」

「いえ、このままではFクラスが科目選択権を3回行使し、Aクラスは1回しか行使出来なくなってしまう。ここは、この2回戦はこれで決めて頂きたいのです。」

さくらはサイコロを1個取り出した。

「これで奇数が出たら日本史、偶然が出たら物理で対決というのはいかがでしょうか、洋太郎君？ご安心をこのサイコロには仕掛けは何もありません。お確かめください。」

さくらはサイコロを手渡した。

「……………特に何も無いようだが、こちらが投げても構わないか？」

「ええ、」  
「では。…コロコロ…4物理か。」

どうやら天は見放したようだ。

「では、物理で行います。」

何でさくらは物理を選んだか…それは

「「試獣召喚！」」

Subject: Physics  
Class A

Name : Sakura Tennosu  
Score : 242

VS

Class F  
Name : Youtaro Ariake  
Score : 63

物理は俺の圧倒的な弱点だからだ。

『おーい!』

Fクラスの皆も今までの点数との違いに驚く。

「行きます!」

さくらの召喚獣はハルバートを両手で持っている。防具はプレート  
メイルだが、その攻撃力は圧巻だろう。

「よっ」と

突きをしゃがんでかわしその隙に中に潜り込んで木の杖でペチペチ  
叩く。

『242 238』

「よ、弱いよ。有明君、大丈夫なの?」

吉井が心配してきた。

「はつきり言つてやばい。防御が薄い。そのうえ魔法召喚獣は単科  
目で100点を越えなきゃ魔法は使えないんだよ。」

そんな事を言ってる間にもさくらのハルバートが引かれた。俺は今  
度は横に避け、攻撃をローブに「掠らせた」。

『63 70』

『得点回復?』

これにはFクラスどころかAクラスの人間も驚いていた。

「これが、魔法召喚獣の特徴。ローブに攻撃を掠らせれば得点を増  
やす事が出来る。」

「関係ありません!」

さくらは今度は横にハルバートを薙いだ。

『700』

だれもかれも俺の敗北を予想していたが……

「リザレクション！」

『0224』

叫んだ途端、召喚獣に付いていた首輪が光り、壊れた。そのかわりに戦死するはずの召喚獣がまた、得点を戻した。

「これが俺の腕輪がわりの能力。単科目でしか使えないが、1回の戦闘で1度だけ総合得点の1割を戦死した教科に分けることが出来る。」

「それでもまだ得点は低いわよ？」

「心配するな。魔法が使えればこっちのものだ。」

魔法が使えたとわかり、さくらは緊張し、攻撃に備えた。

「85点を消費し、シャイン」『224139』

まばゆい光がフィールドを覆った、そして……

「40点を消費し、ウエポナイズ：ブレード」『13999』

杖が刀になり、さくらの召喚獣の首を断ち切る。

『2380』

「勝者Fクラス」

MS・高橋の声がした。

『Aクラス：x』

Fクラス：x『』

Fクラスの歓声に包まれながら、皆が待っている所に戻った。

「流石なのじゃ。」

どうやら秀吉も戻ってきたようだ。

「まあな、」

「では3回戦の代表は前へ。」

一勝一敗のイーブンに持ち直し、大事な3回戦。ここもこちらが科

目選択権を保有しているため

「……………（スック）」

当然、土屋を出す。

「じゃ、ボクが行こうかな。」

Aクラスからは色の薄い髪をショートにした女子が現れた。見た感じ少し男っぽくも見える、あまり見た事がない。

「一年の終盤に転入してきた工藤愛子です。よろしくね。」

「教科は何にしますか？」

「……………保健体育」

高橋女史の質問に対し迷わず答える土屋。彼は残りの9科目では、あの吉井<sup>バカ</sup>にも劣るがこの保健体育だけは学年のどの生徒をも凌駕する實力を持つ。

「土屋君だっけ？随分と保健体育が得意みたいだね？」

工藤が土屋に絡んでくる。余裕の態度で。

「でも、ボクだってかなり得意なんだよ？……………君と違って、実技でね。」

……………保健体育の実技が得意？つまりスポーツが得意と言う意味であろうか？まあ、おそらくはエロ方面であろうけど。

俺の後ろでは吉井がバレバレなぐらいドキドキしているようだった。「そっちのキミ、吉井君だっけ？勉強苦手そうだし保健体育で良かったらボクが教えてあげようか？もちろん実技で」

「フツ。望むところー」

「アキには永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育なんて要らないのよ！」

「そうです！永遠に必要ありません！」

「……………」

「島田に姫路。明久が死ぬほど哀しそうな顔をしているんだが」

俺は思わず呟いた。流石に面白いそうだった。

「そろそろ召喚してください」

MS・高橋の指示でようやく三回戦が始まる。土屋は小太刀の二刀流、工藤のは……

「なんだあの巨大な斧は!？」

明久が驚きの声を上げる。オマケに例の腕輪も装備している。

「実践派と理論派、どっちが強いを見せてあげるよ。」

工藤が笑いかけると同時に腕輪が光り召喚獣が動く、かなりのスピードで。大斧に雷光をまとい土屋の召喚獣に襲い掛かる。

「それじゃ、バイバイ。ムツリーニくん」

「……加速」

土屋がそう呟いた時、土屋の腕輪が輝き、召喚獣がブレた。

「……え？」

戸惑う工藤。土屋の召喚獣は敵の射程外にいた。

「………加速、終了」

土屋がもう一度呟く。次の瞬間、工藤の召喚獣が全身から血を噴き出して倒れた。

Subject: P.E.

Class A

Name: Aiko Kudo

Score: 446

VS

Class F

Name: Kota Tsuchiya

Score: 572

572点など俺の日本史でもなかなかお目にかかれない。工藤もかなりの点数だが土屋はそれすらも大きく越えていた。

「Bクラス戦のときは出来がイマイチだったらしいからな。」

驚く俺と明久に坂本が説明する。そーなのかー。他の科目では俺が勝っているのになぜが負けた気分だ。

「そ、そんな……！この、ボクが……！」

工藤がシヨックで床に膝をつく。それはそうだ。満を持しての高得点がいとも簡単に破られてしまったのだから。

「これで2対1ですね。次の方は？」

高橋女史はそれに構う事無く作業を進める。執着心というものはいのだろうか？

「あ、は、はい。私です」

こちらからは姫路が出る。

「それなら僕が相手をしよう」

Aクラスから出てきたのは久保利光。

「やはり来たか、学年次席。」

坂本の言うとおり、奴は姫路に次ぐ学年三位の実力者で、姫路が振り分け試験を途中退席したため、学年次席の地位になっている。

「ここが一番の心配どころだ。」

雄二の心配には理由がある。久保と姫路の実力はほぼ互角。総合点数ではせいぜい20点程の違いでしかなく。科目次第では負ける可能性が否定できない。最初の対木下戦で出せばよかったのに……まあ、いまさら後悔してもどうしようもないのだが。

「科目はどうしますか？」

「総合科目でお願いします」

MS・高橋が尋ねるとすぐに久保が答えた。

「わかりました。では、始めてください。」

「「試獣召喚！」」

Subject: Total

Class A

Name: Toshimitsu Kubo

Score: 3997

VS

C l a s s F  
N a m e : M i z u k i   H i m e j i  
S c o r e : 4 4 0 7

久保は焦った。1年生の頃はその差は殆どなかったのに2年生になつてからのほんの僅かな期間で自分と姫路との差が大きく増えたのだから。

何があつたのかは知らないが久保は考えた。そのまま戦つたら負け、そして、代表が出ないうちに負けてしまうからだ。そう考えた彼に迷いはなかった。武器の鎌の若干のリーチを生かし一撃で葬り去ろうとした。

そして……

S u b j e c t : T o t a l

C l a s s A

N a m e : T o s h i m i t s u   K u b o

S c o r e : 0

V S

C l a s s F

N a m e : M i z u k i   H i m e j i

S c o r e : 0

彼が選んだのは相打ちだった。僅かにリーチが良くても攻撃の威力は姫路の方が上だからだ。

『……………』

Fクラスはさっきまでのイケイケムードから一気に落胆した。それもそのはずだ。今までクラスを引っ張ってきた姫路が相打ちとは言え、負けたからだ。

「最後の一人、どうぞ、なお、ここでAクラスが勝ちますと、勝敗は全くの同点になります。再交渉の準備をおねがいします。それ

では各代表は前へ」

「……………はい」

Aクラス首席で最後の敵、霧島翔子。そしてFクラスからは当然…

「俺の出番だな」

我らが代表坂本雄二が出る。

「教科は何にしますか？」

「教科は日本史、内容は小学生レベルで百点満点方式だ。」

坂本の宣言でAクラスがざわめきだす。

「わかりました。そうなると問題を用意する必要があります。日本史の飯田先生を呼んできますので、少々このままでお待ちください。」

「

高橋女史は教室を出て行く。俺と明久は坂本に近づく。

「雄二、あとは任せたよ」

「期待しないで待ってるからな」

「まあ、やるだけやってくる。有明、後は頼むぞ。」

「洋太郎で構わない。何となくおまえにはそう呼んでもらいたい。それとその後のことは段取り通りに。」

「おうよ。俺も雄二って呼んでくれ。んじゃあな洋太郎。」

俺達は互いの手を握る。

「……………（ピッ）」

土屋が歩み寄り雄二にピースサインを向ける。

「お前の力には随分助けれた、感謝する」

「……………（フッ）」

土屋は口の端を軽く持ち上げ、元の位置に戻る。

「坂本君、あのこと、教えてくれてありがとうございました」

「ああ。明久の事か。気にするな。あとは頑張れよ」

どうやら雄二は姫路に試召戦争を始めた理由を話したようだ

「はいっ」

「では、最後の勝負、日本史を行います。霧島さんと坂本君は視聴覚室に向かって下さい。」



「……はい。」

霧島が短い返事をし教室を出て行く。

「じゃ、行ってくるか」

それに雄二も続く。

「皆さんはここでモニターを見て下さい。」

高橋女史が機械を操作すると壁にディスプレイに視聴覚室の様子が映し出された。

「では、問題を配ります。制限時間は五十分。100点満点です。では始めてください」

飯田先生の手によって問題用紙が配られる。勝敗はあの問題が出るかに（ある程度）かかっている。万が一坂本が満点をとったら保険の策を使わなくてすむからだ。

そして、テストが終わった。

Subject: Japanese History (Full  
Score: 100)

Class A

Name: Shoko Kirishima

Score: 97

VS

Class F

Name: Yuji Sakamoto

Score: 53

俺はこれほど自分を褒めてあげたいと思った時はなかった。

## 第10問（後書き）

感想を待ってます。Aクラス戦はもう少し続きます。

## 第11問〱本当の決戦〱（前書き）

バカテスト 日本史

問題：次の（ ）に正しい年号を記入しなさい。

（ ）年 キリスト教伝来

霧島翔子の答え

「1549年」

教師のコメント

正解。特にコメントはありません。

坂本雄二の答え

「雪の降り積もる中、寒さに震えるキミの手を握った1993」

教師のコメント

ロマンチックな表現をしても、間違いは間違いです。

## 第11問〜本当の決戦〜

「ただいまの勝負は、Aクラス霧島翔子さんの勝利です。よって2勝2敗1分けで同点です。規定に従い両クラスによる再交渉となります。」

M.S. 高橋が事務的に話したあと、教卓に戻った。

「すまない、俺はトイレに行きたくなつた。代表としては不本意だが席を外したい。まあ、Aクラスを待たせるのも申し訳ないから全権大使として、有明洋太郎に交渉を任せ決定にはすべて従おう。高橋女史構わないか？」

「……トイレであればしょうがないですね。許可します。」

「ありがたい。では失礼。」

雄二がトイレに行きたいとの許可をもらった。

全権を委託された俺は交渉のテーブルに着いた。Aクラスの交渉相手は……

「言つとくけど、Aクラスには戦わないという選択肢は無いわ。さつさと負けを認めなさい。」

木下優子か。

「まあまあ、少し落ち着いて話しましょうよ。時間はまだまだありますし。」

「いいこと、これが最後通牒よ。もう戦えないと負けを認めるか、せいぜい玉砕覚悟で最後まで抗うか、さあ選びなさい。」

「はあ、交渉の余地はないと言つたところでしょうか。……M.S. 高橋、最後に確認したいのですが、もしこちらが玉砕覚悟で戦うときは最初に行つたら対5の結果を継続して、ということになりますよね？」

「そうですね。そうなります。」

「わかりました。……それでは……我々FクラスはAクラスの最後通

牒に従い、『たった今から』試験召喚戦争を行います。」「承認します。」「

「戦死者は補習だー!」

いつの間にいたのやら、Mr・西村が先の5対5での戦死者である、さくら・工藤・久保・姫路を補習室に連れていこうとAクラスを出ようとした矢先のこと…

「Fクラス特攻隊長吉井明久、Aクラスの霧島さん、木下さんを除く全生徒に総合科目で勝負を挑みます!」

吉井が無謀とも言える勝負を仕掛けた。

「何をやってるんだ? 吉井。戦死は目に見えるぞ?」

「本当によろしいのですか?」

本当の意味での特攻になるためMr・西村とMs・高橋が警告をするが、

「やらせてください。」「

吉井は言い切った。

「わしもやるのじゃ。」「

「ウチもやるわ。」「

『俺もだ。』

気付けばごく僅かの生徒を残しFクラスはAクラス全生徒への戦意をみせた。

「わかりました。承認します。」「

『『試験召喚!』!』』

Subject: Total

Class F

Name: Akihisa Yoshii

Score: 759

Class F

Name: Hideyoshi Kinoshita  
Score: 901

Class F  
Name: Minami Shimada  
Score: 845

:  
:  
:  
VS

Class A  
Name: Miho Sato  
Score: 3671

Class A  
Name: Haruki Teramoto  
Score: 3007

Class A  
Name: Kumiko Tamaki  
Score: 2580

:  
:  
:

スマッシュブラザーズも真つ青な両軍入り乱れての大乱闘が始まった。文字通りに点数の桁が違うAクラスとFクラスなのだがその戦況は……

『得点に比べればAクラスはあまり芳しくなく、Fクラスがうまくやっていた』

Aクラスの武器は得点が高いため大剣や大鎌など必然的に巨大な武器になってしまう。

しかし、半径10mの円中に約90人も人がいればどうだろうか？  
このような時、大きな武器はその持ち味を失う。対してFクラスの武器は小型のものがメインである。

また、Fクラスはヒット&アウェイを徹底しており、1回のダメージは少なく一撃でも食らえばそれまで。既に戦死者も出しているが、食らいついている。

「何のつもりかしら。」

戦闘に参加していない木下優子がこれまた参加していない俺に問い掛ける。

「なにつて、強者に弱者が勝つ戦略の一つだよ。あんた以外のAクラスの連中には来てもらっちゃ困るからな。」

「どういつつもりかしら？」

「なあ、あんたの代表が最後に受けたテストってなんだ？」

「何つて、振り分け試験じゃないのかしら。」

「ハズレー、正解はあちらをどうぞ。」

そういつて俺は大乱闘の影に隠れたもう一つのフィールド（せんじよう）を指さす。

Subject: Japanese History

Class A

Name: Shoko Kirishima

Score: 72

VS

Class F

Name: Kensuke Ishibashi Score: 104

Class F

Name: Ryo Sugawa

Score: 78

Class F

Name: Keita Muto

Score: 80

「な、なんで代表があんな点数…ま、まさか！」

「そう、そのまさかさ。霧島が最後に受けたテストはついさっきの対坂本戦での100点満点の日本史。97点だったはずだ。そりやいつもの霧島の点数なら、姫路がない今、いや、多分いても勝てなかっただろう。でも、100点くらいならFクラスにだって取れるやつはいるさ。ほら、こう言ってる間にも…」

Subject: Japanese History

Class A

Name: Shoko Kirishima

Score: 41

VS

Class F

Name: Kensuke Ishibashi Score: 75

Class F

Name: Ryo Sugawa

Score: 68

Class F

Name: Keita Muto

Score: 37

「いつもとは明らかに操作に違いが出ている上、同程度のやつら3人と戦ってるんだ。負けるのも無理はない。」



「そんな……」

木下は唇を嚙んでいた。役に立ちたいのに立てない。召喚したその瞬間、補習室にいつてしまう現状への悔しさが滲み出ている。

「あんたらの敗因はな、Fクラスを完全に嘗めきっていたこと。そして……ルールを研究しなかったことだ。」

その瞬間、石橋の召喚獣の出刃包丁が霧島の召喚獣を切り裂いて、俺達是对Aクラス戦に勝利をおさめた。

## 第11問〱本当の決戦〱（後書き）

実はこれを書きたくてこの小説を書きました。

とはいえ、これで完結はしないでまだまだ続きます。

次回をお楽しみに！

なお、学校が始まったため更新が遅れる可能性があることをご容赦ください。

P・S・第 問の後にサブタイトルを入れてみました。いかがでしょう。好評でしたら、これからと今までのにもサブタイトルを入れていきます。

## 第12問〈戦争と平和（前書き）

バカテスト 世界史

問題：『戦争と平和』を著したロシアの小説家は、誰でしょう？

姫路瑞希の答え

「トルストイ」

教師のコメント

正解です。トルストイの代表作は他にも『アンナ・カレーニナ』や『復活』等文学のみならず、当時の社会にも影響を与えたので覚えておきましょう。

有明洋太郎の答え

「レフ・ニコラエヴィッチ・トルストイ

似たタイトルの『戦争と平和の法』の著者は『国際法の父』フーコー『グロティウス』

教師のコメント

フルネームまで正解です。感服しました。

天王洲さくらの答え

「グロティウス」

教師のコメント

どうやら、有明君と一緒に勉強したようですね。グロティウスはオランダの法学者です。よく覚えておきましょう。

土屋康太の答え

「エローストイ」

教師のコメント

小説家のムード台なしです。土屋君にかかればどんなものでも淫ら

になってしまい残念です。

吉井明久の答え

「トルネコ」

教師のコメント

呆れてものも言えません。後で土屋君と一緒に職員室まで。

## 第12問　戦争と平和

霧島の召喚獣が戦死した。

「やったのじゃ……」

「……ついに」

『システムデスクだ！』

Fクラスの喜びは、頂点に達した。

「……………」

「馬鹿な……」

対してAクラスはまるでお通夜の時のような雰囲気になった。

「……おおー、洋太郎、やったか。」

勝利の叫びを聞いたのか、雄二がAクラスに帰ってきた。

「まあな、臨機応変を辞書から除いてるような奴らに戦争で負けるわけがないさ。」

「違うない。」

俺は雄二と談笑をしていた。その時

「……………雄二、約束。」

あ、やせいのくろかみおじょうがあらわれた！

「は？　どういうつもりだ。翔子？　あんたは負けたんだぞ。」

「……………関係ない。雄二は私に負けた。だから約束。」

「ははは、これは一本取られたな。おまえは霧島に負けたんだ。言うこと聞いてやれよ。」

「洋太郎、おまえもか……分かったよ。なんでも言え。」

霧島はホッとしていた。

「……………！（カチャカチャカチャカチャ！）」

そして土屋は構えていた。

「……………それじゃー」

霧島が姫路に一度視線を送り、再び雄二に戻す。

「……雄二、私と付き合って」

……俺の予想の斜め上の要求だった。

「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか」

雄二は分かっていたようだった。

「……私は諦めない。ずっと、雄二のことが好き」

結局、噂はガセで霧島は幼馴染の雄二が好きだったんだ。姫路を見ていたのは、雄二の近くにいる異性を警戒していたわけだ。

「拒否権は？」

「……ない。約束だから。今からデートに行く」

「ぐあっ！放せ！やっぱこの約束はなかったことにー」

ぐいつ　つかつかつか

お嬢様はまさかの肉体派だった。

「……」

「……」

「……」

あまりの出来事に誰も言葉が出ず、教室にしばしの沈黙が訪れる。そこに現れたるは筋骨隆々の超人。

「さて、お遊びの時間は終わりだ。」

例の補習教師、Mr・西村だった。

「Mr・西村、我々になにか用でも？」

「ああ。今から我がFクラスの補習について説明をしようと思っ  
な」

……我がFクラスとはどういう事だ？

「おめでとう。お前らは戦争に勝ったおかげで、福原先生から俺に  
担任が変わるそう。これから一年、死に物狂いで勉強できるぞ」

「なにいつ！？」

俺を除く男子全員が悲鳴をあげる。

「どうして、鉄人？なんで担任が代わるの？」

吉井が皆の気持ちを代弁するかのように質問する。

「いいか、確かにお前達FクラスはAクラスに勝った。それは心から賞賛しよう。」

賞賛する気は見られないが。

「だが、その後はどうする？お前達はつねに狙われる立場なんだぞ。それに、今回は坂本や有明の作戦に因って勝ったが、お前達の戦い方に先生方からも苦情が出ているんだ。」

「Mr・西村。これはあくまでも戦争でしょう？戦争のやり方に綺麗も汚いもないと思いますか？」

「有明、気持ちはわかるがここは教育機関だ。教育機関である以上、Aクラスから設備を奪い、今の文月学園の代表たるお前達Fクラスにはいい成績を取る義務がある。それと、ルールについては今後改良が加えられるだろう。」

「改悪かもな。でもルールが改正されるまでは戦争は出来ないでしょうね？」

「……そうなるだろうな。それにしても随分落ち着いているな。」

「ええ、どんなルールでも研究して、最善の策を講じる事くらい出来なくて試召戦争研究会なんてやっていませんよ。ところで今日はこれまでですか？」

「ああ、気をつけて帰れ。」

すぐ近くで吉井が島田と姫路から一緒にクレープだとか映画だとか言っていたが関係なかったので無視した。命短し恋せよ乙女ってか。

「さて、帰りますかな。」

「待ってください、洋太郎君。」

突然さくらが呼び止めた。

「なにか、ようか？」

「えっと、一騎打ちの前に話した件ですが……」

「一騎打ち……ああ、話の時間を割いてくれてやってやつか。帰りながらでもいいか？」

「はい。」

### 下校途中

「で、なんだ？話って。」

「えっと…まずは、どうやってAクラスに勝ったのですか？補習室にいたのでわかりませんでした。」

「じゃあ、ヒントを。霧島翔子が『最後に』受けたテストは？」

「それは、…振り分け…いえ、坂本君との日本史テストですね。でもどうやってその状況を作ったのですか？まさか洋太郎君が一気に片を付けたのですか？」

「まさか、そんなことしたら我らが代表のモットー『学力がいいやつが必ずしも勝つとは限らない』に反しちまう。」

「なら、どうやって…？」

「強引に霧島とそれ以外とに分けるようにすればいい。」

「では……まさか、霧島さん以外の全員と試召戦争を行うと？でも、Fクラスの生徒ではあっさりやられて元の木阿弥ですよ？」

「一人でダメならみんなでやればいい。霧島を叩く部隊＋俺を除いて全員が全員に申し込んだ。そうすればどちらかのクラスが全滅するまで時間を稼げる。相手のクラスが誰か一人でも残っているのに戦闘を止め引つ込めたら補習行きだ。」

「そんな事したら、守りは…。」

「さくらは驚いていた、余りにも防御を考えないこの作戦に。」

「だから、俺は一騎打ち、その後の交渉をAクラスの中で行った。」

「例えるなら、Fクラスは既にAクラスの本丸まで侵略しているようなものだ。真面目さを煮詰めたようなAクラスの連中が、戦争の交渉中にAクラスをでないだろ？それに、万一AクラスのやつがFクラスを全滅にする。あるいは、霧島がいつもより圧倒的にひどい性能でも同程度の点数の奴ら3人を葬り去ったとしても、俺がいるからな。そうなったらなりふり構わず無双するだけだ。」

「つまり、Aクラスを会場にしていた時点で…」



「ああ、俺の作戦は組み上がった。<sup>シナリオ</sup>」

「ほ、流石です。」

「褒めても何もでないぞ。」

そんな風に、話しているうちに自宅のそばまで着いた。

「んじやな、また明日なさくら」

「待ってください!!」

いきなりさくらの声が大きくなった。

「わっ!びっくりした。」

「わわ、ごめんなさい。でも、もう一つ大事な話があります。」

「今じやなきやダメか?」

「はい、(スー…ハー…うん、頑張れワタシっ)…私、天王洲さくらは有明洋太郎君のことが好きです。」

「……はい?」

衝撃的だった。

「だから、私は洋太郎君のことが好きなんです。大好きなんです! Loveなんですっ!!」

「お、落ち着けて。」

「あ、ごめんなさい。取り乱しちゃって…恥ずかしい。…あの…お返事聞かせてください。」

今の朱くなつたさくらはとても可愛かった。そんなさくらに俺は…

「俺を理解できそうなのはさくらだけだと思う。俺で良かったらよろしくな。」

「……は、はいっ。」

さくらは嬉し涙を流していた。こんなに想ってくれていたことに感謝だ。

「それで、…明日デートに行きませんか?」

いきなりデートのお誘いだった。

「喜んで、でも場所とかは?」

「心配ありません。私に任せて下さい。」

「分かった。じゃあな。」

「はい、また明日。」

俺は明日からが楽しみになった。

## 第12問 戦争と平和（後書き）

一応原作1巻はこれでおしまいです。

この後は洋太郎君とさくらちゃんの日デート等を挟み学祭編となります。

感想待ってます。

## 第12・1問

朝、目を覚ますと知らない天井だった。

「……………」

はつきり言っているいろいろあつて言葉にできない。

「なんじゃこりゃ〜！」

「あ、洋太郎君お目覚めになりましたか？おはようございます。  
なんでさくらがここにいるんだ？…ってことはまさか……？」

「なあ、さくら。ここって…」

「はい、洋太郎君の家のはすむかいの天王洲家ですよ。」

デスヨネー。でもそうになると机から何からのインテリアの配置はどうやって？

「じゃあ、なんで机とかもここにあるんだ？」

「えっと、親御さんに聞いていませんでしたか？」

「何を？」

「洋太郎君が今日から、ここに住むのを。大変だったんですよ、洋太郎君が寝ている間に引越しさせるのは。」

ナ、ナンダッテー！

霧島のお嬢様はかなりの肉体派でしたが、天王洲のお嬢様もなかなかの行動派でした。ていうか、なんでそんなことを、うちの親は当事者たる俺に伝えなかったんだ？

「着替えが終わったら朝食を頂くので、下の階の食堂に降りて下さいね。場所はわかりますよね？」

「ああ、一応な。」

まあ、ともかくご飯を食べなければどうにもならないので、着替えて下に降りる。

まあ、いつものように軽く朝食を食べ、歯磨き等を終わると、

「洋太郎君、今日はデートですよ、デートっ！」

「はいはい、わかってますって。」

「では、もう一度デート用に身嗜みを整えるので…覗かないで下さいね。」

「誰がするかっての、犯罪者にはなりたかねえよ。」

「ありがとうございます。……心の準備が出来たら毎日でもお見せしますから。（ボソッ）」

最後の方は何を言っているのかよく分からなかったが、気にすることはない。

俺は期待しながらさくらを待っていた。

## 第12・1問（後書き）

かなり短めですみません。

学校が忙しくなりますので今後は更新が不定期になりますが、ご了承ください。

次回はデート本編です。

## 第12・2問

「お待たせしました。」

「……………」

さくらの身支度が終わり、顔を見せたが、言葉を失った。  
艶やかな金髪に合うような黒のワンピース。顔には薄化粧を施し、  
魅力を十分引き出している。

「…どうかなさいましたか？」

「…いや、見とれてた。」

「…そんな（カツ）」

さくらは頬を桃色に染めて、そんなさくらに見とれてて……

しばらくして、

「…こんなことをしても、仕方がない。そろそろ行くつか？」

「……………そう、ですね。」

「…ん。どこに行くつもりなんだ？」

「えーっと、『げーせん』なるものに行きたいのですが、この辺りにはたくさん有りまして……どこがいいのか分からないのです。」  
「げーせんだと？」

「げーせんって…何をしたいんだ？」

「いえ、ただ皆さんがよく行っているとのことでしたので、行ってみたいと思っていましたのです。」

「ふーん、じゃあ行くか？俺がよく行ってる所でいいよな？」

「はいっ。」

「ゲームセンター」

俺達は地元で一・二を争う大きさのゲーセンに行った。途中手を繋いで歩いたがさくらの手はすべすべだった。

「ここが、げーせんですか？」

「いかにも」

「それで、どうやって遊ぶのでしょうか？」

全く知らないんだな。いまどき珍しく。

「まあ、いろいろとあるけど……俺がいつもやっている感じでいいか？」

「はい、お願いします。」

というわけで、俺はいつもやっている4×4の四角い機械の前へ、  
そうj beatだ。

「こいつが俺がゲーセンに来たときにいつもやっているやつだな。」

「どうやって遊ぶのですか？」

「端的に言えば、曲のリズムに合わせてこのパネルを叩くんだ。ちよつと見ててな。」

…とりあえず、赤の…あれぐらいでいいかな。難易度的にも、出来たらカッコイイし、ノーグレイ程度ならやってるからな。

…凜として咲く花の如く…

タラララ、ララン、タララ、タララ…んっていったようなイントロが流れる。俺はここから目の前の4×4に集中した。

凜としてはんなり…の…心

やり終えた、とりあえず見本にしてはやり過ぎたと思うが…隣を見てみると。

「……………」

やっぱりな。

「あのー、これってある程度のレベルになると叩く順番とかを覚えたりするんですか？」

「まあ、そうなんじゃないか？赤になると初見で出来たらたいしたものだよ。っていうか怖い。」

「そうなのですか。先程の曲なら何とか行けそうですが？」



「……え。……んじゃ、やってみて。」  
さくらは初見で出来るというが……流石に初めてやって出来たらも  
はや奇跡だぞ。

少女 j u b e t 中

俺は奇跡を目の当たりにした。

## 第12・2問（後書き）

更新が非常に遅れ、申し訳ありません。

書いてる時間が通学時の地下鉄の時間でして……オリジナルシリカは難しいです。

辞めたりはしないので気長にお待ち下さい。

なお、やってほしい企画がありましたら、教えてください。

## 第12・3問

「…なんだよ。いきなりフルコンって……」

「お気持ちを害したらすみません。でも…できちゃいました」

「しかし、よく出来たな。なんかコツでもあるのか？」

「いえ、何となくです。リストの超絶技巧練習曲の方がずっと難しいですよ？」

こ、これが天衣無縫なのか？確かにさくらは音楽は超一流だけど、まあ別に『白の星屑』『ニユイ・エトール』等の二つ名は付いていないが。

「……んじゃ、昼飯はどうするよ。」

「うーん、ネットで評判のカフェがありますから、そこにしませんか？」

「いいんじゃない。場所は？わかるのか？」

「はい、NAV TIMEなのです。」

……さくらも大分ノリが良くなったみたいだ。

### 喫茶店ラ・ペデイス

さくらの AVI TIME の（ちょっと間違えたりもした）案内で着いた喫茶店はなかなか感じの良いものだった。

「さて、何を食べようか。」

「そうですね。私はこのオススメのチョコブルーベリーショートケーキにしましょう。」

何だろう。なんか……

「ふーん。んじゃあ俺は……ブルーチーズケーキとか、完全に地雷だろ。…このウーロンミルクレープにしてみよう。」

ほかにまともな料理が見つからない。

「では、頼みましょうか。すいませーん。」

さくらが店員を呼ぶとツインテールの店員が現れた。

「お待たせしまし…チツ美春達をどん底に陥れた豚野郎と…思い出しました、Fクラス（バカ）に負けたAクラス（大バカ）の一員でしたか。」

「なんだ？なかなか、喧嘩腰だな…まあいい、このチョコブルーベリーショートケーキとウーロンミルククレープを1こずつ」

「お飲みものは？さつさと決めなさい。」

「紅茶でいいよな？「はい」…紅茶2つ」

「当店に『紅茶』と言う飲み物はありませんわ。豚野郎」

…は？

「どういうことでしょうか？」

「だから、紅茶といってもダーズリンやアッサムとでも言ってもらわなければ困りますわ。」

…品種指定…だと。コーヒーショップならまだしも、ただの喫茶店でそこまでいくか。

「それでしたら又ワラエリアを」

「そちらの豚野郎は？」

「ラブサン・スーチョン」

「畏まりましたわ」

「洋太郎君、ラブサン・スーチョンはお菓子には向きませんよ。」

「ああ、正直ミスったと思ってる。ラブサン・スーチョンまで揃えているってどんだけだよ。」

「流石、評判のお店ですね。」

はたして、そうなのだろうか？

「お待たせしましたわ。さつさと食べてさつさと帰って下さいませ。」

喫茶店にあるまじき台詞だ。それにしてもラブサン・スーチョンの臭いが…正丸そっくりだ。

「とりあえず、いただきますでしょうか。…ハムハム…これ、おいしい

ですう」

MA J I D E ?

「どれ……うまい。」

テレッツテレー！

その名前とは裏腹に結構いけるぞ。そうだな。抹茶があるんだから烏龍茶でもいけないことはないよな。まだまだ料理は奥が深いな……。

そう思索に耽っていると

「洋太郎…君…」

さくらが顔を赤らめながらフォークを突き出した。これは、まさか、あれなのか？

「その……あーん……」

(・・)キター(・・)これでリア充ルート突入でいいよね。

「…早く食べて…下さい。」

何だろう、すぐエロく聞こえる。とりあえず、さくらのケーキを食べる。なんかイケるな。

まあ、こんな感じでデートは終わった。

とりあえず、今度行くときはキーマンあたりにしよう。ラブサン・スーチョンはやり過ぎだ。

### 第13問（前書き）

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力ください？  
あなたが今欲しい物はなんですか？』

姫路瑞希の答え

『クラスメイトとの思い出』

教師のコメント

なるほど。お客さんの思い出になるような、そういった出し物も良  
いかもしれませんね。  
写真館とかも候補になりうると覚えておきます。

土屋康太の答え

『Hな本（訂正） 成人向けの写真集』

教師のコメント

訂正の意味があるのでしょうか。

吉井明久の答え

『カロリーー』

教師のコメント

この回答に、君の生命の危機が感じられます。

有明洋太郎の答え

『別に……』

教師のコメント

……まあ、  
今が充実しているという事です。

### 第13問

桜色の花びらが辺りからフェードアウトし、代わりに青々とした緑が現れ始めたこのごろ。我が文月学園では、年度の最初の行事である『清涼祭』の準備が始まりつつある。準備の為のLHRろんくほーむるーむの時間では、どの教室も活気が溢れている。そして、我がFクラスは……

――シーン――

クラス内には俺の他に比較的真面目な3人（名前はあえて上げなくても分かるはずだ）しかいない。むろん準備など出来るはずもない。ちなみに俺は試召戦争研究会のレポートを作っている。Aクラスのパソコン設備は快適だ。

「まったく。もうすぐ清涼祭が始まるのに何やってんだか……」  
俺の隣に島田が座ってきた。

「LHRの時間を使って野球をやろうとか言い出したのは雄二だろ？ 試召戦争のときは代表らしくまとめたから今回もあいつ主導でうまく進むと思ったんだが、あいつ何考えてんだ？」

「そうだと良いんだけど、残念ながら違うと思うわ。坂本って一年の頃から興味の無い事には全然やる気出さないから」

「要はあいつ、清涼祭に興味がないって事だよな？」

「そうでしょ。一年の頃もあんま関心なさそうにしてたし」

「ふーん。ま、俺も試召戦争研究会の仕事があるからどっちでも良いけどな」

「それでも……今回の清涼祭だけは何とかうまくいかせたいのよ……」

少し深刻そうな顔を島田がしながら呟く。

「何だよ、今回の清涼祭だけはって？ 今までの学園祭とは違う何か



でも……」

俺がそう言いかけたちようどそのとき

「貴様ら、学園祭の準備をサボって何をしているか！」

Mr. 西村の怒声が聞こえてきた。クラス内に居ても聞こえてくるのは彼だからだろう。まあ、他のクラスのみなさんには迷惑をかけたことをお詫びします。

「さて、そろそろ清涼祭の出し物を決めなくちゃいけない時期が来たんだが……とりあえず、議事進行並びに実行委員として誰かを任命する。そいつに全権を委ねるので、後は任せた。」

本当にどうでも良さそうな態度である。島田の言うとおり雄二は興味の無い事には全くやる気ゼロで清涼祭にも興味がないようだ。

「うーん……学園祭実行委員は島田ということでもいいか？」

不意に雄二の言葉が耳に飛び込む。

「え？ウチがやるの？……ウチは召喚大会に出るから、ちょっと困るかな」

雄二に推薦された島田はあまり乗り気じゃないようだった。

「雄二。実行委員なら、美波より姫路さんの方が適任じゃないの？」

「え？私ですか？」

そこに吉井が姫路を推薦する。しかし、その判断はアウトだ。

「姫路には無理だな。多分全員の意見を聞いてるうちにタイムアップになる」

雄二の言うとおり、姫路には少数意見を切り捨てるような事はできないからそうなる可能性は高い。

「それにね、アキ。瑞希も召喚大会に出るのよ」

「え？そうなの？」

「はい。美波ちゃんと組んで出場するんですよ」「学校の宣伝みたいな行事なのに。二人とも物好きだなあ」

意外そうに吉井は言う。清涼祭のイベントの一つに『試験召喚大会』

という企画があり、これの目的は吉井の言つとおり文月学園の宣伝活動のようなものだ。ってか宣伝だ。

「ウチは瑞希に誘われてなんだけどね。瑞希ってばお父さんを見返したいって言つてきかないんだから」

「お父さんを見返す？」

吉井が不思議そうに聞き返す。

「そつ。家で色々言われたんだつて。『Ｆクラスの事をバカにされたんです！許せません！』って怒ってるの」

「へー。姫路さんが怒るなんて珍しいね。」

「それだけＦクラスに対する思い入れが強いという事じゃねえのか？」

「だって、皆の事を何も分かってないくせに、Ｆクラスって言う理由だけでバカにするんですよ？許せませんっ」

いや、姫路には悪いがＦクラスの連中はバカの集団だと思う。学力でもそれ以外でも。しかしながら、何も分かってないくせにバカにされたのは面白くない。

「だから、Ｆクラスのウチと組んで、召喚大会で優勝してお父さんの鼻をあかそうってワケ」

「確かにそいつは面白そうな話だよな。」

「四人とも。こつちの話を続けていいか？」

「すまない、雄二。実行委員が島田になる話だよな？」

「だからウチは召喚大会に出るって言ってるのに」

「なら、サポートとして副実行委員を選出しよう。それなら良いだろう？」

チラツと雄二が俺と吉井の方を見た。おそらくは、経験則からして多分吉井の方を見たつもりで、吉井を副実行委員に仕立て上げる気だろう。

「んそうね、その副実行委員次第でやってもいいけど……」

「そうか。では、まず皆に副実行委員の候補を挙げてもらう。その

中から島田が二人を選んで決定投票をしたらいいだろう」

皆もいいな、とクラスメイト達に告げる。すると、教室内からちらほらと推薦の声が聞こえてきた。

「吉井が適任だと思う」

「やはり坂本がやるべきじゃないか？」

「有明なら確実だろ。」

「ここは須川にやってもらった方が」

「姫路さんと結婚したい」

クラス内から何人かの適任者の名前が挙がる without 1  
astで

「ワシは明久が適任じゃと思うがの」

明久に秀吉が一票を投じる。

「つて、秀吉。僕もそう言う面倒な役は、できればパスしたいなんて」

「それは他の皆とて同意見じゃ。ならば適任のものにやってもらった方が良いでしょう？」

「むう……それはそうだけど……」

秀吉の言うことが正論なのか反論できない様子の明久。（明久が適任かどうかの保証はしかねるが）

「よし島田。今挙がつた連中から二人を選んでくれ」

「そうね。それじゃ……」

ある程度候補の名前が挙がると、島田はホワイトボード用のマーカーで名前を書いてゆく。

『候補？……吉井』

予想通りの名前が出る。

『候補？……明久』

その発想はFクラス故だと信じたい。

「さて、この二人の中からどちらが良いか、選んでくれ」

「ねえ雄二。明らかに美波の候補の挙げ方はおかしいと思わない？」

俺は書かれていないからどうでもいい。

「そうだなあ……どちらもクズには変わりないんだが……」

「こらあ！真面目に悩んでるフリするんじゃない！あと、平然とクラスメイトをクズ呼ばわりなんて、君らは人間のクズだ！このクラスのもラルはどうなってるんだ！」

「落ち着け吉井。このクラスにもラルなんて高尚なものがあるわけねえだろ。」

適当に明久を煙に巻いてみる。

「普通はあつて当然の物なんだけど」

「ざんねん、ここはFクラスだ。」

「そう言われると何故か納得できちゃうのが不思議だよ……」

「ほらほら、アキつてば。そんな事より、ウチとアンタでやることに決まったんだから、前に出て議事をやらないと」

お前の仕業だと心の中のみで言っておく。

「なんだか僕はいつもこんな貧乏くじを引かされている気がするよ……」島田に促され、吉井は席を立てて前に出た。

「んじゃ、あとは任せたぞ。ふあ……」

入れ替わり席に戻る雄二。席に戻った途端熟睡しそうな感じだ。つてか寝る。

「ウチは議事をやるから、アキは板書をお願いね」

「ん、了解」

「それじゃ、ちゃっちゃと決めるわよ。クラスの出し物でやりたいものがあれば挙手してもらえる？」

島田が告げると何人かが挙手する。

「はい、土屋」

「……（スクツ）」

土屋が名前（つてか異名）を呼ばれて立ち上がった。

「……写真館」

「……土屋の言う写真館で、かなり危険な予感がするんだけど」

島田が思いつ切り嫌そうな顔をする。

女子からすればムツツリー二の撮る写真は嫌であろうが、男子からすると宝の山らしい。

推定の助動詞を使ったのは俺はまだ買っていないからだ。一応前に見せてもらったがギリギリの工口が見え隠れしていた。

「アキ、一応候補だから黒板に書いてもらえる？」

「あいよー」

吉井の生返事。

【候補？ 写真館『秘密の覗き部屋』】

あの馬鹿にしては珍しく要点を捕らえていたが、いかんせん逮捕されるであろう。

「次。……はい、横溝」

「メイド喫茶と言いたいけど、流石に使い古されていると思うので、ここは斬新にウェディング喫茶を提案します。」

「ウェディング喫茶？それってどういうの？」

「別に普通の喫茶店だけど、ウェイトレスがウェディングドレスを着てるんだ」

まあ、衣装がウェディングドレスなだけだ。

「斬新ではあるな。」

「憧れる女子も多そうだ。」

「でも、ウェディングドレスって動きにくくないか？」

「調達するのも大変そうだぞ？」

「それに、男は嫌がらないか？人生の墓場、とか言うぐらいだしな。」

「

そんな意見に、クラスの中が少しざわめく。

「ほら、アキ。今の意見もボードに書いて」

「あ、うん」

島田に促されて、吉井がホワイトボードに横溝の提案を書く。

【候補？ウェディング喫茶『人生の墓場』】

こいつは学園祭の出し物だと考えているのだろうか？多分、違うな。

「さて、他に意見は……須川」

「俺は中華喫茶を提案する」

須川が立ち上がる。

「中華喫茶？チャイナドレスでも着せようって言うの？」

「いや、違う。俺の提案する中華喫茶は本格的なウーロン茶と簡単な飲茶を出す店だ。そうやってイロモノ的な格好をして稼ごうってワケじゃない。そもそも、食の起源は中国にあるという言葉があることからわかるように、こと『食べる』という文化に対しては中国ほど奥の深いジャンルはない。近年、ヨーロッパ文化による中華料理の淘汰が世間では見られるが、本来食というのは……」

料理好きな俺としてはなかなか興味深い内容だった。確かに世界三大料理の一角にはなっているが、須川は特に中華料理に強いこだわりでもあるという事がありありと伝わる。

「アキ、それじゃ、須川の意見もボードに書いてくれる？」

「あ、うん」

吉井は困って手を止めた。恐らく須川の言った事が殆どわからなかったようだ。

「どうしたの？早く書いてよ」

「りよ、了解」

島田に急かされてやっと書き始める。

【候補？中華喫茶『ヨーロッパピアン』】  
センセーショナルすぎる名前だ。

そこへ、教室の扉が開き、Mr. 西村が入ってくる。はたしてこれを見せていいものか疑問に思う。

「清涼祭の出し物は決まったか？」

「今のところ、候補はこの三つです」

島田が言うと、鉄人はホワイトボードを見る。

【候補？ 写真館『秘密の覗き部屋』】

【候補？ ウェディング喫茶『人生の墓場』】

【候補？中華喫茶『ヨーロッパ』】

「……補習の時間を倍にしたほうが良いかもしれんな」

「やっぱり俺達がバカだと思われてるが、残念ながら正論だ。」

「せ、先生！それは違うんです！」

「そうです！それは吉井が勝手に書いたんです！」

「僕らがバカなわけじゃありません！」

「クラスの連中が吉井をバカ扱いして弁明しようとする。」

「馬鹿者！みつともない言い訳をするな！」

Mr・西村の一喝で、背筋が伸びる一同。

やはり、クラスメイトを売ってその場を逃れようとするのが気に入らないのであるのか？

「先生はバカな吉井を選んだ事自体が頭の悪い行動だと言っているんだ！」

教師にあるまじき発言だ、が『ここはFクラスだ』と言われれば何とも言えない。

「全くお前達は……少しは真面目にやったらどうだ。稼ぎを出して楽しく打ち上げとか、そう言ういった気持ちすらないのか？」

溜息まじりの鉄人の台詞。それを聞いて、クラスの連中の目が急に輝きだした。

「そうか、その手があったか！」

「み、皆さんっ！頑張りましょう！」

これは姫路の声だ。姫路は立ち上がって胸の前で手を握り、

（『ギョツてした』のポーズ）

やる気を見せている。姫路がこんな風に率先するとは思わなかった。

「出し物はどうする？利潤の多い喫茶店が良いんじゃないか？」

「いや、初期投資の少ない写真館の方が……」

「けど、それだと運営委員会の見回りで営業停止処分を受ける可能性もあるぞ。」

「中華喫茶ならはずれはないだろう。」

「それだと目新しさに欠けるな。どちらかといえば西洋的なこの教室だと、厳しくないか？」

「ウェディング喫茶はどうだ？」

「初期投資が高すぎる。たった二日の清涼祭じゃ儲けは出ないんじゃないか。」

「リスクが高いからこそリターンも大きいはずだ！」

Fクラスはやる気になった。しかし、意見がまとまりそうに無かった。

「はいはい！ちょっと静かにして！」

島田が手を叩いて注意する。効果はないようだ。さらに次から次へと意見が出はじめる。

「お化け屋敷なんかの方が受けると思う。」

「簡単なカジノを作ろう。」

「焼きとうもろこしを作ろう。」

意見がてんでバラバラになっていく。試召戦争のときとは比べ物にならないほどだ。こんな連中をまとめていた雄二のクラス代表としての手腕はやはり相当なもの、いや相当以上だと思い知らされる。ホワイトボードの前では島田と吉井がなにか話してるようだ、クラスの連中ががやがやしているせいでよく聞こえない。

「もうっ。とにかく静かにして！決まりそうにないから、店はさっきの挙がった候補から選ぶからね！」

業を煮やした島田が無理矢理話をまとめた。妥当な判断だろう。

「ほらっ！ブーブー言わないの！この三つの中から一つだけ選んで手を挙げる事いいわね！」

しまだのにらみつけるこうげき！

Fクラスのぼうぎよがさがった！

強引に決を採りにかかる島田。おそらく雄二も島田のこういうところを期待して推薦したのだろう。

「それじゃ、写真館に賛成の人！はい、次はウェディング喫茶！最後、中華喫茶！」



島田の声が教室に響くが、それでも喧騒は収まらない。

騒然としている中、島田が挙げられた手の本数をカウントし始めた。

その結果……

「Fクラスの出し物は中華喫茶にします！全員、協力するように！」  
接戦で中華喫茶が勝利となった。

「それなら、お茶と飲茶は俺が引き受けるよ」

提案者の須川が立ち上がる。むろんの事だ。

「……………（スクツ）」

そして何故か土屋も立ち上がるのだが、俺が聞いてみる。

「お前、中華料理とかできんのか？」

「……………紳士の嗜み」

中華料理が紳士の嗜み？よくわからないが、土屋のことだから俺にはよくわからない下心が絡んだ理由だろう。

そこへ秀吉が声をかけてくる。

「安心せい洋太郎、ムツツリー二は手先が器用で物覚えも早いのじやから安心して任せられるじやろう」

「秀吉が言うなら俺も安心できるが……………」

と言いかけて俺はさつき秀吉が明久を副実行委員に推薦し、その結果。鉄人に補習を増やされそうになった事を思い出し少し不安になったしまった。だったら……………

「すまない、須川。俺も料理班に入れてくれ。」

「え、有明。あんた試召戦争研究会の仕事があるんじゃないや。」

島田が疑問をていした。

「レポートだから、テキトーに家帰ってやるよ。まあ、料理と聞いちゃ黙ってられないからね。須川、これで問題ないか？」

そういつて俺は銀色の免許証を見せた。

「え、有明それ何？うおおー、これは学食一級厨师の免状。俺だつて三級だぞ。……………有明、それって何なの？」

「うーん、何て言ったらいいかわからんが……………とりあえず、島田こ

の学園の学食が評判なのは知ってるか？」

「ええ、ウチもたまに学食に行くけどいつも人がいっぱいね。それにどれを食べてもおいしかったわ。」

「ああ、あそこにいる人達はみんなこんな感じの免状持つてるんだよ。」

「で、で有明君つ有明君つてどれくらいのランクなの？」

食べ物の話になったからか吉井が割り込んできた。

「ああ、ちよつと待つてる。今、表を出してやる。」

俺はパソコンを用いて表をダウンロードしてスクリーンにUPした。

#### 文月学園食堂廚師

特級：（要求事項・料理と栄養に関する膨大な知識を有し、あらゆる調理を素早くかつ美味しく作ること）一級廚師の中から、筆記・実技・互選とで決定され、食材の注文を始め、全ての食堂業務の監修を行える。

一級：（要求事項・料理に関する膨大な知識を有し、あらゆる料理を美味しく作ること）筆記・実技試験で決定され、レシピ考案を始め、料理に関する全ての業務を行える。

二級：（要求事項・料理に関するあらゆる知識を有し、料理を美味しく作ること）筆記・実技試験で決定され、調理に関する全ての業務を行える。更に細かく和・洋・中に別れる。

三級：（要求事項・料理に関する知識を有すること）筆記試験で決定され、二級以上の同伴の下、味に関わらない業務を行える。

「……………」

悲しいかな、理解力を投げ捨てているFクラスでは沈黙以外の言葉が出ていない。

「とりあえず凄いつていうことはよくわかったわ。じゃあまずは厨房班とホール班に分かれてもらうからね。厨房班は須川と土屋のと

ころ、ホール班はアキのところに集まって！」

そして何故か吉井をホール班のトップにする島田。

「それじゃ、私は厨房班に……」

「ダメだ姫路さん！キミはホール班じゃないと！」

さも当然とばかりに厨房班に入ろうとした姫路を明久が止めた。

「明久、グッジョブじゃ」

「命に関わる判断は早いじゃねえか」

「……………！（コクコク）」

その殺傷能力を知っている俺、秀吉、土屋からのアイコンタクト（覚えさせられた）。最大の犠牲者であった雄二は寝ている為か気づかない……はずだが、小刻みに震えていた。まさか夢の中でも姫路の料理を食べてるのか？

「え？吉井君、どうして私はホール班じゃないとダメなんですか？」

シリアルキラー

無自覚な台所の死神が首を傾げる。俺は本当のことを話したが吉井達は姫路に妙に気を使っているため根本的な解決には至っていない。

「あ、えーと、ほら、姫路さんは可愛いから、ホールでお客様に接したほうがお店として利益が痛あつ！み、美波！僕の背中にはサンドバックじゃないよ！？」

「か、可愛いだなんて……吉井君がそう言うなら、ホールでも頑張りますねっ」

ホールオンリーで頑張ってくれ。

「アキ。ウチは厨房にしようかな？」

「うん。適任だと思う」

こいつ死亡フラグだ。

「それなら、ワシも厨房にしようかの？」

「秀吉、何を馬鹿なことを言ってるのさ。そんなに可愛いんだから、もちろんホールに決まってみぎやああつ！み、美波様！折れます！腰骨が！命に関わる大事な骨が！」

「ウチもホールにするわ」

「そ、そうですね……それが、いいと、思います……」

死亡フラグ回収。

### 第13問（後書き）

大変遅くなって申し訳ありません。

厨師制度は完全にオリジナルです。ご容赦下さい。

これからもちまちま投稿させていただきます。

## 第14問（前書き）

バカテスト - 地理

問題：バルト三国と呼ばれる国を全て挙げなさい。

姫路瑞希の答え

「リトアニア・ラトビア・エストニア」

教師のコメント

そのとおりです。

有明洋太郎の答え

「東フランク王国・西フランク王国・ロタール王国」

教師のコメント

世界史脳から抜け出して下さい。

土屋康太の答え

「アジア、ヨーロッパ、浦安」

教師のコメント

土屋君にとっての国の定義が気になります。

吉井明久の答え

「香川、徳島、愛媛、高地」

教師のコメント

正解不正解の前に、数があっていないことに違和感を覚えましょう。

## 第14問

「さてと、レポート書きに行くか」

帰りのホームルームも終わり、学校でやれなかったレポート作成に勤しもうと鞆をとった矢先…

「だってアンタと坂本って、愛し合ってるんでしょ？」

「もう僕お嫁にいけないっ！」

吉井と島田の訳が分からない会話が聞こえてきた。

1、なんで吉井と坂本が愛し合ってるという設定なのか

2、仮にそうでも吉井は男なので嫁じゃなくて婿だ

流石Fクラス。些細な会話でツツコミポイントが2つだ。

「誰が雄二なんかと！だったら僕は断然秀吉の方がいいよ！」

いいのかよ……相変わらず例のあのバカの思考は俺の常識の範疇を越えている。

「……あ、明久？」

偶然、二人の会話を聞いていた秀吉の動きが止まる。

「そ、その、お主の気持ちは嬉しいが、そんなことを言われても、ワシらには色々と障害があると思うのじゃ。その、ホラ。年の差とか……」

残念ながらその問題は解消されている。

ってゆうか、このクラスではこんなところでいちいち突っ込んでられない。ツツコミ芸人なら、収穫祭どころか、乱獲したってまだ溢れるだろう。

「それじゃ、坂本は動いてくれないってこと？」

「え？あ、うん。そういうことになるかな」

島田が話を変え、吉井がそれに答える。雄二がどうしたんだ？

「なんとかできないの？このままじゃ喫茶店が失敗に終わるような……」

不思議な事を言う島田。

「てか、さっきから何の話なんだよ、明久と雄二が愛し合ってるとか、喫茶店が失敗するとか、脈絡が全然繋がってねえだろ」

秀吉はさっきから顔を赤くしているため、仕方なしに俺が二人に聞く。

「深刻って程じゃないんだけど……」

「アキ、そうじゃないの。本当に深刻なのよ……」

「え？どういうこと？」

まさか、当事者同士でも話題が繋がってないとは。

深刻とは……さっきの俺との会話とも関わるのだろうか？

「本人には誰にも言わないで欲しいって言われたんだけど、事情が事情だし……けど、一応秘密の話だからね？」

「う、うん。わかった」

「了解した。」

島田のいつも以上に真剣な顔に、明久が少し気圧されてるようだった。

「実は瑞希なんだけど」

「姫路さん？姫路さんがどうしたの？」

「早えよ。最後まで聞け」

姫路のこととなると、急に食いつく吉井を窘める。

「あの子、転校するかもしれないの」

「ほえ？」

島田の言葉に明久が変な声を出す。（気持ち悪い）

「島田。一体どういうことだ？……おい？明久？なに固まってんだお前？」

「む。マズイ。明久が処理落ちしかけておるぞ。」

「このバカ！不測の事態に弱いんだから！」

「処理落ちって……容量のないコンピューターじゃあるまいし……」

「明久、目を覚ますのじゃ！」

秀吉が明久の肩を揺すって起こそうとする。（起こすという動詞が



適切かは分からないが。」

「秀吉……、モヒカンになった僕でも、好きになってくれるかい……？」

「どういう処理をしたら、瑞希の転校からこういう反応が得られるのかしら」

「ある意味、稀有な才能かもしれんのだ」

「いや、少なくとも才能じゃあねえな。」

俺たち三人は思い思いの感想を口にする。

「美波！姫路さんが転校ってどういうこと？」

明久が正気に戻り島田に詰め寄る。

「どうもこうも、そのままの意味。このままだと瑞希は転校しちゃうかもしれないの」

「このまま？」

島田の言い回しは妙だ。この言い方だと転校はまだ確定したわけではない。

「島田よ。その姫路の転校と、さっきの話が全然繋がらんのが、秀吉が小首を傾げる。俺は島田に自分が今思っている（それ以外にはあまりないであろう）事を口にしてみる。」

「島田。姫路の転校の理由って、Fクラスが原因なのか？」

「そうなのよ。正確には『Fクラスの環境』が問題なんだけど」

俺が言ったFクラスが原因というのは環境メンツとか以外の問題点の事だが、確証がないため口には出さない事にする。そこに明久が口を開く。

「ってコトは、転校の理由は両親の仕事の都合とかじゃなくて……」

「うん、このクラスの純粋な学力よ。」

「まあな、確かに設備に関しては、ある程度の期間は雄二や俺の計略で最高の設備にはしたがな、学力は上がってるわけないからな。」

「悔しいけど正解よ。瑞希も抵抗して『召喚大会で優勝して両親にFクラスを見直してもらおう』とか考えているみたいんだけど、どうにかしないと」

Fクラス＝バカの集まりだからというのが転校を勧められる一因だ

から姫路の行動も間違つてはない。

ただ、振り分け試験を姫路の病気で休んだのにFクラスを受け入れないのは両親の問題かもしれないが。

「……アキはその……瑞希が転校したりとか嫌だよね……？」

島田が探るような目で吉井を見ている。吉井にとつて姫路は特別な相手だということを島田もある程度は気づいてるようだ。故に、明久を意識している節（暴力的手段だが）のある島田にとっては気になることのようなのだ。

「もちろん嫌に決まつてる！姫路さんに限らず、それが美波や秀吉や洋太郎であつても！」

いつのまにか名前と呼ばれている。

「そつか……うん、アンタはそうだよな！」

島田が嬉しそうに頷く。今、名前を挙げた四人以外でも土屋や雄二に対しても同じように思っているのだらう……多分、恐らく、きっと。

「そういうことなら、やっぱどうにかして雄二を焚き付ける必要があるな」

「そうじゃな。ワシもクラスメイトの転校と聞いては黙っておれん」「まあ、親の心子知らずってよく言っけど子の心親知らずつてもあるんだらうな。」

「それじゃ、まずは雄二に連絡を取らないとね」

そう言つと吉井は、雄二に携帯をかける。呼び出し音が受信器から聞こえる。

「もしもし、あ、雄二。ちょっと話が」

吉井が雄二に話をしようとする。

「え？雄二。今何をしてるの？」

……が、様子がおかしい。

「雄二！？もしもし！もしもーし！」

話を伝える前に切られたようだ……

「坂本はなんて言ってた？」

「えっと『見つかった』とか『鞆を頼む』とか言ってた」

「……なにそれ？」

島田がクズを見るような目で明久を睨む。流石にこれは吉井のせいではないと思うが…。

「大方、霧島翔子から逃げ回っているのじやろう。アレはああ見えて異性には滅法弱いからのう」

秀吉が腕を組んでうんうんと頷いている。確かにAクラス戦の次の日もあいつは朝から追いかけてた。

「はあ、そうすると、坂本と連絡取るのは難しいわね」

島田が大きく息を吐く。

「いや、これはチャンスだ」

明久が突然明るい声を出す。

「え？どういうこと？」

「雄二を喫茶店に引つ張り出すには丁度いい状況なんだよ。うん。ちよっと三人とも聞いてくれるかな？」

「それはいいけど……坂本の居場所はわかってるの？」

「大丈夫。相手の考えが読めるのは、なにも雄二だけじゃない」

「何か考えがあるようじゃな」

「珍しくお前が頼もしく見えるな。」

「まあね」

俺達は吉井に連れられて教室をあとにした。

吉井が雄二がいそうな場所とやらに行つてからしばらく時間が過ぎたところで島田の携帯が鳴り出す。

「誰からじゃ？」

「アキの携帯からよ」

「ってことは雄二が見つかったってことか？」

島田が携帯に出る。

「もしもし？坂本？」

「島田か。一体何の真似だ？」

「ちよつと待つて。今替わるから」

秀吉が島田の携帯を取る。

「……雄二。今どこ」

これは秀吉による霧島の声真似だ。プン（電話が切られた音）

「とりあえず、これで雄二を呼び出せるってわけなのか？まあ何もやってない俺が言うのも難だけど」

「でも、アキも凄いわね。本当に坂本の居場所がわかつちやうんだもん、一体どうやって……」

「全く、相変わらずFクラスは馬鹿なことしかやらないわね」

島田が言いかけたところで後ろから声がする。

「姉上！」

秀吉が声を挙げる。後ろにいたのは秀吉の双子の姉の木下優子だった。

「ああ、誰かと思ったらAクラスを豚小屋に押し込んだ張本人様では有りませんか。」

「なんですって……だいたいあんたがあんな卑怯な真似をするから……」

「卑怯・汚い、敗者の戯言。これは戦争だ。どんな方法であれ勝ったやつが正義なんだよ。」

「洋太郎よ、これ以上姉上を挑発しないでくれないか？で、姉上よ。今のやり取りの何処が馬鹿なのじゃ？」

売り言葉に買い言葉となったこの状況を秀吉が止めようとした。

「別にあなたたちの今のやり取りなんて関係ないのよ。」

「だったら一体何が馬鹿なのよ！」

島田が少しイラついたような表情で木下に詰問する。

「さつき、体育館裏の女子更衣室でFクラスの坂本君と吉井君が隠れてたのよ。」

「……」

どうやら、雄二は霧島から逃れる為に女子更衣室に隠れてそこに吉井が探しに来たらしい。女子更衣室に隠れる雄二も雄二だが、なぜ明久は雄二が女子更衣室に隠れてるのがわかったのが謎だ。

まあ、解明したところで何の足しにもならない（むしろ、無駄な時間を使ってマイナスか。）

「ま、あいつらの考える事は俺らにもよくわからんからな、俺らに文句言われてもどうしようもねえな」

俺は軽く木下姉の相手をする。

「あなた、この前の試召戦争でAクラスに勝ったからっていい気になってるんじゃないの？」

どうやら挑発と受け取ったらしく、木下姉がそんなことを言い出す。「とんでもない。むしろあそこまで真面目腐ったような奴らが相手だと楽勝にも程がある。頭脳戦ならまだあのBクラス代表『卑怯者』のほうがマシだったよ。」

あ、それはそうと10時間のテストお疲れ様でした。」

俺は冷笑を込めて答える、この発言は本当の挑発だ。木下は拳を握り締めて俺を睨みつける。

「この前といい今といいFクラスの癖にいい加減にしなさいよ……試召戦争はゲームじゃないのよ。ろくに勉強しないで起こした時点で充分楽しようとしてるようなものだわ。」

「この学校に入ったのは貴様だろ。んでルールを受け入れたからにはこんな事態もあつてしかるべきだ。嫌ならさっさと転校するんだな。」

「覚えてらっしゃい。停止期間が終わったら直ぐにでもFクラス相手に試召戦争を起こしてFクラスに相応しい設備にしてあげるわ。」そう捨て台詞を言いながら木下姉は去っていった。

「へっ、おととい来やがれ！いつもいつでも振り返ちにしてやらあ最後の最後まで喧嘩腰で返してやった。」

「なによあれ！嫌な感じ！双子なのにウチらの木下とは大違いね！」

「まあ、あいつにとってのＦクラスは怠けてばかりいるくせに権利ばかり主張する自分勝手な集団つてとこなんだろう？そのくせ勝っちゃったからな、自称真面目にやってきた人にとっちゃあ溜まったもんじゃねえだろ。」

未だに怒りを抑えられない島田に自分の所見を言う。

「島田に洋太郎よ、すまぬのう……姉上のせいで不愉快な思いをさせてしまった」

秀吉が申し訳なさそうに俺達に謝る。

「なんでお前が謝るんだよ？このぐらい返せなきゃ参謀なんてやってられない。」

「そうよ木下。あんたはウチらの仲間だしいい奴だつてわかってるんだから、あんなお姉さんの言う事であんたが負い目感じる必要なんてないわよ。」

「洋太郎に島田……うむ。そういつてもらえるとうれしいぞい、お主らとクラスメイトでワシはよかったのじゃ。」

秀吉はようやく笑顔になり、そこに吉井と雄二もようやくやってきた。

「そうか。姫路の転校か……」

俺達は吉井と雄二と合流した後、Ｆクラスの教室に戻った。

「そうになると、喫茶店の成功だけでは不十分だな」

「ってゆうか、喫茶店は関係なくねえか？」

「え？どうして？」

明久が疑問を投げかける。

「姫路に転校を勧めた要因は恐らく三つ」

「そついい、雄二は指を三本立てて見せた。」

「まず一つ目。Ｆクラスの綿のない座布団とちゃぶ台という貧相な設備。快適な学習環境ではない、という面だな。」  
「そついいながら指を一本引つ込める。」

「二つ目は、老朽化した教室。これは健康に害のある学習環境という面だ」

「一つ目は道具で二つ目は教室自体ってこと？」

「確かに。でも、まあこの2つの問題については解消されたからな。」

俺が代弁する。

「そして、三つ目。レベルの低いクラスメイト。つまり姫路の成長を促すことのできない教育環境だ。そしてこれが唯一にして最大の問題だ。」

雄二の言うとおり、能力を伸ばすために実力の近いもの同士を競わせる事はベタベタだ。しかしこのFクラスにはそんな相手はいない。クラス内で姫路の次に成績の高い俺でも競争相手になれるかどうか不確定だ。歴史は姫路の段階を圧倒的に越えているし、その他では手も足もでない。まして、坂本達ではなおさらだ。

「参ったね。随分と問題だらけだ」

「そうじゃな。一つ目や二つ目ならともかく、と三つ目は難しいのう」

吉井と秀吉が不安そうに言う。

「そうでもないさ。三つ目の方は既に姫路と島田で対策を練っているんだろ？」

雄二が島田に視線を送る。確かに、今日のロングホームルームで姫路は『お父さんの鼻をあかす』と言っていた。Fクラスにも学年トップと渡り合える生徒がいるという証明になるだろう。

「この前、瑞希に頼まれちゃったからね。『どうしても転校したくないから協力して下さい』って。召喚大会なんて見せ物にされるだけみたいで嫌だけど、あそこまで必死に頼まれたら、ね？」

「翔子が参加するようななら優勝は難しいが、アイツはこういった行事には無関心だしな。姫路と島田の優勝は充分ありえるだろう。」

「確かに姫路の本来の学力は学年次席だし、島田も数学ならBクラス並。やってやれないことでもないな。」

俺も雄二の意見に賛成する。霧島が参加するとなると恐らくパートナーもAクラスの生徒だろうし、そうなると姫路でもパートナーが島田では勝ち目は薄くなる。

「本当なら姫路抜きでFクラスの生徒が優勝するのが望ましいけどな」

雄二が俺のほうを見てそう言う。

「残念ながら俺は召喚大会の解説をやることになってるからな。それに姫路が島田を選んだんなら島田が出たほうがいいだろ。」

「姫路と島田が優勝したら、喫茶店の宣伝にもなるし一石二鳥じゃな」

「放送します。2年Fクラスの有明洋太郎君。至急学園長室までお越しください。繰り返します……」

「あれ、有明？あんな学園長に呼ばれているみたいだけどなにかあったの？」

いきなり俺が呼び出されので島田が疑問を示す。

「いや、あのクソヤロー何かと雑用があると俺を呼ぶんだよ。さてさて今日は何が起こるのかな？」

「ねえねえ、洋太郎君。それって観察処分者みたいなの？だったら仲間だね。」

吉井が期待を込めた目で こつちをみている。

「あほか、そんな肉体労働なら貴様にやらせるわ。馬鹿には出来ない仕事をさせるんだよ。すまない、雄二。何かあるといけなからしばらく待機してくれ。」

「了解。」

俺は学園長室へと足を運んだ。



## 第14問（後書き）

感想などなど待ってます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1978s/>

---

バカと奇人と召喚獣

2011年10月8日23時24分発行